

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-31

EToS : 法政大学江戸東京研究センター年度 報告書, vol.7

(出版者 / Publisher)
法政大学江戸東京研究センター

(開始ページ / Start Page)
1

(終了ページ / End Page)
46

(発行年 / Year)
2024-03-31

法政大学

EToS

2023 vol.7

7

江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies



表紙図版の出典(上から):

- 「天保江戸大地図(1843年)」国立国会図書館
- 「国土地理院航空写真(2017年)」国土地理院
- (一財)日本地図センター刊行「参謀本部陸軍部測量局 五千分一東京測量原図」のうち「新宿区市ヶ谷付近」を使用
- 「ソリッド・ボイド・マップ(2018年)」法政大学北山研究室製作

EToS 法政大学
江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies

法政大学 江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for Edo-Tokyo Studies
<https://edotokyo.hosei.ac.jp>
問い合わせ先: 法政大学 江戸東京研究センター事務局
E-mail edotokyo-jimu@ml.hosei.ac.jp TEL 03-3264-9682

発行: 2024年3月31日

目次

マニフェスト	2
記憶から創造へー過去を知り、近未来への道筋を示す 江戸東京研究センター長、法政大学文学部教授 米家志乃布	3
研究プロジェクト活動報告	
① 地理情報システムと名所の景観	4
② 江戸東京の文学と都市史	6
③ 表象文化と近未来デザイン	8
④ 外濠市民塾	10
⑤ イタリア大使館庭園プロジェクト	12
⑥ 国際共同研究「Edo Castle Mission」	15
⑦ 東京発掘プロジェクト2023／ 千代田レジェンド・リノベーション	16
2023年度事業報告	
シンポジウム・研究会	
報告会「江戸東京研究センター2022年度報告会」	20
シンポジウム「関東大震災100年 大地震と都市空間～過去に学び、近未来を描く」	20
研究会「東京と小説を考える 東京小説家・山崎修平氏を囲んで」	23
シンポジウム「島からみる江戸東京～交流・広がり・領域」	24
シンポジウム「ヴェネツィア国際シンポジウム報告」	25
研究会「下北沢から考えるー下北沢の街歩き＋クロストーク」	29
シンポジウム「東京湾シンポジウム」	30
報告会「江戸東京研究センター2023年度報告会」	31
学内外・地域活動	
講義「フィールドワーク」／講義「都市解読方法特論ー東京発掘プロジェクト 水辺編」／ 講義「人文地理学セミナーA／B」	32
外濠市民塾協カイベント「天馬船プロジェクト2023／日本橋川」	33
著書・論文・その他	34
メンバー	46

持続可能な地球社会の実現に向け、
近代のパラダイムを超えた
都市の未来を考えるために、
私たちは、新・江戸東京研究に挑戦します。

As we head towards the reality of
sustainable global communities,
we rise to the challenge of New Edo-Tokyo Studies
in considering the future of the city free
from the modern-era paradigm.

江戸東京研究センターは、江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出し、その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点です。

The Research Center for Edo-Tokyo Studies unearths and reevaluates the nature, history, culture and human resources that have accumulated in Edo-Tokyo and live on today, and in so doing clarifies the reasons why the city has endured culturally and spatially, and derives from them a method and theory for constructing sustainable global communities. It is a learning research base where that wisdom is nurtured and widened into a “practical wisdom” for solving the various issues of global communities.

江戸東京研究センター長、法政大学文学部教授

米家志乃布

本センターは、2017年度に文部科学省・私立大学研究ブランディング事業「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」に採択されたことにより設置されました。当初の研究期間である5年を経過し、現在まで大学より延長が認められてきました。新しい段階として、当センター独自の新たな江戸東京研究の可能性を継続して調査・研究し、単なる歴史だけでなく、これからの東京、そして日本の価値観の転換と行く先を考える視点を見出すことを目標としています。とりわけ、法政大学が総合大学であることの利点を生かし、理系と文系が協働して研究を進める当センターの特徴と意義をより前面に押し出すような枠組みを新たに設定いたしました。

具体的には、従来の5つのプロジェクトを「地理情報システムと名所の景観」「江戸東京の文学と都市史」、「表象文化と近未来デザイン」の3つのプロジェクトに再編いたしました。市ヶ谷校地に理系のデザイン工学部が存在していることを活かして、個々のプロジェクトに当該学部からリーダーを選出し、文系のリーダーとの共同関係をスムーズに築けるようにしたうえで、2022年度の途中から徐々に新たな体制に移行しながら、それぞれに研究活動を行っております。

また、昨年度末には、全体の研究成果として、江戸東京研究

センター編『EToS叢書4 新・江戸東京研究の世界』（法政大学出版局）を刊行しました。2021年秋に5年間の各プロジェクトを横断する成果として行った全体シンポジウムの内容を踏まえつつ、今後の方向性を示しております。その成果を踏まえ、江戸東京研究センターの第2フェーズとしてのグランドデザインを「記憶から創造へ」および「過去を知り、近未来への道筋を示す」とし、歴史的な記憶や経験を近未来の東京の創造に活かすための研究活動を行うことを当面の課題としています。

引き続き、「文理複眼」を枠組みとした江戸東京研究センターの特色を生かした研究活動を推進し、国内外における研究会やシンポジウムにおいて研究成果を発表しながら、当センターの学術的な存在意義をアピールしていきたいと考えます。



米家志乃布

法政大学文学部教授。

1968年静岡県生まれ。1995年お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻中退。博士（人文科学）。法政大学第一教養部専任講師、助教授を経て2007年より同文学部地理学科教授。専門は歴史地理学。著書に『近世蝦夷地の地域情報－日本北方地図史再考』法政大学出版局2021年。分担執筆に「名所と視覚的経験－江戸東京の風景」（江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局2022年）など。

1

Project 1

地理情報システムと名所の景観

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー **福井恒明**
法政大学文学部地理学科教授、プロジェクトリーダー **米家志乃布**

本プロジェクトは、江戸東京の様々な名所を地理情報システム(GIS)上の空間に重ねることから、2次元・3次元に名所景観を表現する方法を探究し、それを具体的なかたちで公開することを目標としています。今年度は、これまでの名所研究に関するプロジェクト成果のまとめや補足研究を行いつつ、新たな作業として、(1)中国における名所景観表現、(2)関東大震災後に発行された写真帖に掲載された東京名所の景観とその地域性、(3)近代東京の新名所としての学校に注目し、関東地方における学校の立地展開の特徴を明らかにしました。各自の作業経過はSLACK(オンラインコミュニケーションツール)で共有しながら、月1回のプロジェクトミーティングにおいて、グループ作業の進捗報告と意見交換を行っています。

(1) 中国における名所景観表現

本研究は、日本の名所やその表現に影響を与えたと考えられる中国の名所案内本を対象として、掲載されている挿絵に描かれた領域に関する分析を行いました。対象とした資料は、中国で旅行が盛んになった明代後期に発行された『新鐫海内奇観(しんせんかいないきかん)』(1609)であり、

100枚余りの挿絵で43箇所の名所が紹介されています。掲載された挿絵のうち名所周辺の空間の広がりや描写されている30ヶ所について描写された要素のうち名称が付記されているものを抽出し、それらをGIS上にプロットし、描写範囲の特徴を確認しました。描写された要素は、対象とする名所を構成する建物や地形地物の他に、その名所の広域的な位置関係を見せる遠方の山岳などが含まれていました。名所を構成する要素の分布範囲を確認したところ、半数は10km以内、3/4は30km以内の範囲に納まっており、地域のみとまりとして認識される領域のスケールを確認できました。これを超える領域が描写されているものには山脈を紹介するもの、湖周辺の領域を紹介するものがあり、特に後者は500km近い範囲が描かれています。名所としての比較的小さな領域認識と、地形を手がかりとした広域的な領域認識があることが示唆されました。

(2) 関東大震災写真帖にみる東京名所の地域性

本研究では、関東大震災写真帖を対象に「撮影対象地点の分布の比較分析」と「地域ごとの写真の内容分析」の2つを行いました。1つ目の「撮影対象地点の分布の比較分

析」では、出版時期や出版した組織といった異なる特徴をもつ3冊の写真帖を対象に取り上げ、写真の対象となった場所をGIS上にプロットし、それぞれ重ね合わせてその分布を比較分析します。これら3冊すべてで、麹町区東側とそこに隣接する神田区、日本橋区、京橋区といった場所に撮影地点の密集がみられました。これら地域は、近代的・西洋的建築物や東京内外の人が知る名所が多く存在した地域でもありました。

2つ目の「地域ごとの写真の内容分析」では、写真帖に掲載された写真を地域ごとに集計し、「被害」「避難民」のような写真の対象物(者)や視線といった写真の内容を分類しました。そのうえで、地域ごとの特徴・イメージと写真の内容を照らし合わせ、写真の対象物(者)や写し出し方と地域の関係性を分析しました。これら「撮影対象地点の分布の比較分析」と「地域ごとの写真の内容分析」の結果から、関東大震災写真帖は、焼失地域の内側と焼失地域の外側で異なる名所の表象であったことが明らかになりました。

(3) 関東地方における大学キャンパスの立地展開

本研究では、戦後の関東地方における大学等のキャンパス

が展開していく過程と東京の都市化に関わる諸要素との関連が明らかになりました。鉄道路線の分布はキャンパスの設置場所の決定に大いに関係したほか、近年は新規に開業した路線の沿線に新たに建設される傾向があります。人口の分布との関連も強く、全地域で人口が増える時期には全地域でキャンパスが増えたのち、郊外への流出期にはキャンパスも郊外に移転しました。その後の人口が都心に回帰した時期にはキャンパスも都心に再び進出するようになりました。また、地価との関連はここまでの二つよりは弱いものの、少しでも地価が安い自治体を選んで立地する傾向が見られます。本プロジェクトでは、2022年度以降、これまでの作業成果を書籍としてまとめ、出版することを目標としています。本年度は、主に書籍に掲載する地図の表現について試行錯誤を繰り返し、作業を行っていく予定です。

最後に、デザイン工学部都市環境デザイン工学科・大学院デザイン工学研究科・文学部地理学科・大学院人文科学研究科の学生・院生のみなさんの作業により、今年度も順調に本プロジェクトを進めることができました。ご協力いただいた皆様に心より感謝いたします。



福井恒明

法政大学デザイン工学部教授

1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。博士(工学)。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学デザイン工学部准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『景観用語事典』、『コンパクト建築設計資料集[都市再生]』『水都学V』など。千代田区などの景観行政、葛飾柴又・四万十・佐渡の文化的景観に関わる。



米家志乃布

法政大学文学部教授。

1968年静岡県生まれ。1995年お茶の水女子大学大学院比較文化学専攻中退。博士(人文科学)。法政大学第一教養部専任講師、助教授を経て2007年より同文学部地理学科教授。専門は歴史地理学。著書に『近世蝦夷地の地域情報—日本北方地図史再考』法政大学出版局2021年。分担執筆に「名所と視覚的経験—江戸東京の風景」(江戸東京研究センター編『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局2022年)。

2

Project 2

江戸東京の文学と都市史

法政大学文学部教授、プロジェクトリーダー 小林ふみ子

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 高村雅彦

「江戸東京の文学と都市史」プロジェクトは、当センターの研究の歴史的部分を担当しています。先史時代以来の歴史のなかでもとりわけ近世・近代の人文的な文化の基層を明らかにし、その上で地域のコンテキストや仕組みがいかに形成されてきたのかを、文字テキストや図像によって表象された名所空間などを文理双方の視点から複眼的分析することによってその特質を探ることをめざすものです。2023年度は、おもにこれまで開催してきたシンポジウムをもとに研究を深め、その成果を刊行しました。

3月末の奥付で刊行した『東アジアの都市とジェンダー 過去から問い直す』（文学通信）は、当センターの設立以来の課題であった、近隣の東アジアの諸都市との比較、女性にとっての都市の問題にとり組んだものです。小林とともに、朝鮮や日本を中心に東アジアの近世文学や文化を研究する染谷智幸氏（茨城キリスト教大学教授、本学国際日本学研究所客員研究員）を共編者に迎え、2021年2月に開催した「漢陽と江戸東京 それぞれの暮らし」、2022年2月の「東アジア近世・近代都市空間のなかの女性」の成果を、それぞれ第1部「都市生活を較べる」、第2部「女性の描く都市・都市のなかの女性」とし、さらに前者で参考文献とした漢陽の都

市生活を記した『朝鮮の雑誌 18～19世紀ソウル両班の趣向』の抄訳を付録としました。いずれもシンポジウム時の発表やコメントをふまえて、それぞれの登壇者が討論をふまえて深化させるとともに、そのときに欠けていた視点をあらたな依頼で補い、加えて第3部「日中韓の女性たち」として、双方においてディスカッサントを務められた方にも寄稿いただいた全17章構成です。濃淡はあれ、中国の、とりわけ儒教的価値観の影響下にあった東アジアの諸都市と較べ、日本の都市、とくに江戸東京では自然との関係において、人為的な加工を厭わない、むしろ好む傾向が見られること、女性にとっては日本では比較的自由があったとはいえ、いずれにも共通して倫理規範や行動の制約から男性とはまったく異なる都市が経験され、身分や立場によって分断され、女性のなかでも差異があることがあきらかになりました。テキストや図像を、作者にとっての都市の経験を描いたものとして解釈することで、実態として物理的に都市がいかに存在しているかという事実とは別に、それがそこに暮らす、あるいは訪れる人間にとってどのような場として経験されるかという問題があることが浮かびあがったと考えています。このうち第1部は文系だけでなく、理系の都市史の視点と交差させたことで人工的な

加工を好む日本の都市の特徴がいずれからも確認できました。

9月に刊行した田中優子編『落語がつくる〈江戸東京〉』（岩波書店）は、21年度のシンポジウム「落語がつくる『江戸東京』イメージ」の成果集です。本センターのこれまでの研究で、震災、火災、水害、戦災を経験するなかで有形のモニュメントが失われてきた江戸東京では、物語、伝承、行事や慣習といった無形物によって都市としてのアイデンティティーが保たれてきたことに注目してきました。本企画ではそうした口碑の一つとして、江戸を舞台に借りながら実態としては近代になって詳しく記録されるようになり、くり返し高座に掛けられるなかで作りあげられてきた落語に注目し、全11章で構成しました。第1部「都市の物語としての落語」において共同体を支える物語りとしての位置づけを行い、第2部「落語がつくる地理感覚」において落語のなかで地名を通じて現代東京とは異なる空間、またそこに生きる庶民の暮らしや気質のありようが想像されたことが論じられました。そのなかで落語に託されたある種の理想の共同体の象徴として長屋噺が機能したことに注目したのが第3部「長屋噺をめぐるフィクションとリアリティ」で、そこに近世だけでなく近代の価値観やありようも投影されていることがあきらかにされ、そこで第4部「長屋の比較文化論」として長屋噺の舞台として想像されてきた近現代の長屋のありようを紹介するとともに、中国やイタリアとの比較によって国や文化圏を超えた理想の人間の暮らしという大きな問題へとつなげました。本書においては第3部までの文系諸分野の成果のうえに第4部で理系の長屋研究を載せることで、有機的な連携になったのではないかと自負しています。

新規の取り組みとしては、東京湾をテーマとしたシンポジウムを2月15日に開催しています。大河を擁する都市は世界に数あるなかで、江戸東京が巨大な湾に面していることの特異性については実はこれまであまり考えられてきていなかった

ようです。その地形の成り立ちや海岸線の変化を確認し、近代化以前に平面だけでなく高低差や水深も視野にどのような魅力や可能性が見いだされてきたのかを考え、さらに近世から近現代に埋め立てと利用が進められながらも、そこに大きなビジョンが欠けていただけにむしろ将来に向けてさまざまな展望を描き得ること、いっぽうでは災害への備えも含めて構想する必要などが議論されました。都市史、自然地理学、古地図研究、美術史と多方面にわたる報告者が諸分野の研究史をふまえた新知見をもちよって考察する文理複眼の有効性が実感されたこともふまえ、今後さらに深めていきたいテーマとして、センターをあげてとり組んでいくことを確認したところです。

その他、たばこと塩の博物館「没後二〇〇年 江戸の知の巨星大田南畝の世界」を日本近世文学会とともに後援しました。たんなる一文学者という存在を超えて、多方面に記録を残し、とりわけ江戸の歴史や伝承の保存に尽力した人物の足跡を広く知らしめる事業に当センターとして寄与することができました。

次年度は東京湾プロジェクトをはじめ、さらなる文理複眼の進展をめざしてあらたな研究を模索したいと考えているところです。それにあたってプロジェクト名称を「文学と都市史」という2つの関係性のわかりにくい名称から、文字テキストの語りや残された図像をもとにした新たな都市史をめざすという企図を込めて、「都市表象史」などとする事も併せて計画しています。



高村雅彦

1964年北海道生まれ。法政大学大学院博士課程修了。2008年より法政大学デザイン工学部建築学科教授。専門はアジア都市史・建築史。1999年前田工学賞、2000年建築史学会賞を受賞。2013年上海同济大学客員教授。主な編著書に『水都学Ⅰ～Ⅴ』（法政大学出版局、2013年～2016年）、『タイの水辺都市 一天使の都を中心にⅠ』（法政大学出版局、2011年）、『中国江南の都市とくらし 水のまちな環境形成』（山川出版社、2000年）などがある。



小林ふみ子

1973年山梨県生まれ。東京大学大学院博士課程修了。2004年法政大学着任、2014年より文学部教授。専門は日本近世文学・文化。2004年第29回日本古典文学会賞、2023年第17回国際浮世絵学会賞を受賞。主著に『天明狂歌研究』（汲古書院、2009年）、『大田南畝江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店、2014年）、『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル、2019年）などがある。

3

Project 3

表象文化と近未来デザイン

現代の東京を歩く実践知のレッスン

法政大学国際文化学部教授、プロジェクトリーダー 岡村民夫
法政大学デザイン工学部准教授、プロジェクトリーダー 山道拓人

2022年度はじめに定めた「表象文化と近未来デザイン」プロジェクトの基本方針を維持し、文理協働の研究をさらに進めるとともに、東京の過去を振り返りつつ東京の今後についてアクチュアルに考えることが、2023年度の活動目標だった。ただし、従来のように予算が付かなくなったため、法政大学外部のゲストを呼ぶことができず、プロジェクト企画として何ができるかを模索した結果、ようやく12月以降に二つの研究会を開催することができた。

いずれも江戸東京研究センター外から詩人で小説家の山崎修平氏が参加した。山崎氏は、詩集『ロックンロールは死んだらしいよ』（2016年）を皮切りに、詩集『ダンスする食う寝る』（2020年）、長編小説『テーゲベックのきれいな香り』（2022年）、小説『愛がすべて』（2023年）という前衛的作品を矢継ぎ早に発表した新進作家であり、法政大学大学院人文科学研究科で西脇順三郎を研究していた文学研究者でもあり、近代日本文学研究の方面での岡村の友人でもある。「東京」や「都市」を創作の重要テーマとし、東京の隅々を歩きまわって鋭い観察を重ねてきた山崎氏を招き、私たちの研究活動に新鮮な風を入れたいとかねてから考えていたのだが、それが実現できたことは大きな収穫である。

まず12月16日に「東京と小説を考える 東京小説家・山崎修平氏を囲んで」という研究会を開催した。『テーゲベックのきれいな香り』の創作プロセスや問題意識、自身の東京経験や街並みの変化に関する感慨などを具体的に表情豊かに語られ、若い現役作家ならではのユニークな講演となった。起伏に富んだ都市である東京の坂道は身体感覚を伴って記憶に刻まれるが、概して再開発は起伏を均し東京を平板化してしまうという意見や、絶え間なく乱開発される東京に生きてきたせいで、失われたものを書き残そうとする欲望が掻き立てられ、「私とは何者か」という問わざるをえなくなるという話には、いろいろなことを考えさせられた。コメントを岡村と山道が担当し、研究会終了後にも3人で自由に話し合った。かくして相互理解が深まったことが、つぎの研究会にうまくつながったといえる。

続く、2024年1月26日は、再び同じメンバーで（岡村民夫＋山道拓人＋ゲスト山崎修平）「下北沢から考える-下北沢の街歩き＋クロストーク」と題して研究会を行った。実際に街を、起伏や、歴史、開発の状況を紐解き、体感しながら歩いた。その実感を持った上で、クロストークをすることでより領域横断的な対話の状況を作り、時間軸を超え、街に対する理解

を深めた。さらに一般参加者も一緒にポエトリーリーディングを掛け合い、双方向的な会となった。

両研究会とも、同じメンバーによる小規模なものだったが、これまでにない新たな試みとなった。またプロジェクトリーダーどうしの交流が進み、プロジェクトとしてのまとまりを強めることができたので、今後の展開にとって有意義な活動になったと考える。最後に、プロジェクトリーダー自身の研究について述べておく。岡村は2021年以降の日本のアニメにおける東京表象の研究を継続し、その過渡的成果を、「アニメと東京」（『新・江戸東研究講座』第6回、9月8日、NHK文化センター）、「東京の表象文化（アニメと東京）」（東京都通訳ガイド育成事業・通訳ガイドスキルアップ研修、11月1日、オンライン）、「アニメーションにおいて「東京」はいかに表象されているのか 聖地巡礼の可能性」（コンテンツツーリズム学会第11回大会・基調講演、11月5日、関東学院大学横浜関内キャンパス）、「Anime Pilgrimage and Representations of Tokyo in Japanese Animation」（International Conference “Public and private spaces in Tokyo and Venice”、1月12日、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学）という講演を通して発表した。2021年度以降の新作アニメ映画を分析対象に組み込み、聖地巡礼に関しての考察を進展させた内容となっている。他に岡村は、近代文学に表象された東京の研究成果として、江戸東京研究センター・法政大学地理学会共催シンポジウム「関東大震災100年 大地震と都市空間～過去に学び、近未来を開く～」(10月21日)で「故郷喪失から新たな故郷へ 芥川龍之介・堀辰雄・立原道造」という発表をし、江戸東京研究センター主催シンポジウム「島からみる江戸東京ー交流・広がり・領域ー」(12月23日)で「宮沢賢治と伊豆大島」という発表を行った。

山道がリーダーを務めた「近未来デザイン」サイドにおいては、過去2年進めてきた「都市東京の近未来」プロジェクトにおける町家・長屋に関する研究を今年も進めた。今年、地

方都市において町家に関わる方々への取材を3件行った。

2021年は、京町家や町家の原則や地方都市の町家活用事例など、江戸的な町家へのアプローチで執筆。2022年度は、現代的な町家（商店街の中の長屋的な喫茶店、団地の路面階を改修した長屋的なシェアキッチン、シェアコンビニ）における実践者への取材と執筆。

続く本年、2023年度は、これまでの2年で足りないと思われる分野を補強するために取材を追加で行った。町家の取引をサポートするプラットフォームを運営者、施工者へ、設計・移住者、取材と執筆を行った。

・移住：北山恒氏（法政大学名誉フェロー、江戸東京研究センタープロジェクトリーダー前任）

北山氏は京都にて古い町家をリノベーションし、東京と二拠点居住をしている。奥まった敷地における町家の改修の利点と障壁、地域と関わる際のポイントや生活が開始してからの実態を伺った。

・施工者・プラットフォーム運営者：株式会社 八清（ハチセ）は、京都で最も有名な企業。町家の賃貸や売買をサポートするwebプラットフォームの運営や事業、施工を手掛けている。町家の取り扱いの障壁などについて取材を行った。

・移住サポート・プラットフォーム運営者：岐阜郡上八幡で活動をする「チームまちや」猪股誠野氏。移住のための枠組み作りや、町家改修における水回りの問題などの実情を取材した。

当初の目標では、2023年度中に出版を目指していたが、実現には至らず、2024年度引き続き出版社と議論を進めていくことを予定している。

また、2024年度は「表象文化と近未来デザイン」プロジェクトでも、他の組織との共催などのかたちで、外部の講師も交えたシンポジウムができるよう努めたい。



岡村民夫

1961年横浜生まれ。立教大学大学院文学研究科単位取得満期退学。法政大学国際文化学部教授。表象文化論、場所論。著書に『旅するニーチェ リゾートの哲学』（白水社、2004年）、『イーハトーブ温泉学』（みすず書房、2008年）、『柳田国男のスイスー渡欧体験と一国民俗学』（森話社、2013年）、『立原道造ー故郷を建てる詩人』（水声社、2018年）、『宮沢賢治論ー心象の大地へ』（七月社、2020年）など。宮沢賢治学会イーハトーブセンター代表理事、四季派学会理事、表象文化論学会会員、日本エスプレント協会会員。



山道拓人（さんどう・たくと）

1986年東京都生まれ。東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。ツバメアーキテクト代表取締役、法政大学デザイン工学部准教授。代表作に「下北線路街BONUS TRACK」「ツルガソネ保育所・特養通り抜けプロジェクト」「天窓の町家ー奈良井宿 重要伝統的建造物の改修ー」「NHK Media Design Studio」「パナソニックのデザインスタジオ FUTURE LIFE FACTORY」など。

4

Project 4 外濠市民塾

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 福井恒明

1. はじめに
外濠市民塾は2023年度で12年目の活動を実施した。法政大・東京理科大・日大・東京都立大などの学生と教員、地元企業である大日本印刷の社員を主体とし、『外濠—江戸東京の水回廊—』の出版内容に関する勉強会からワークショップの開催を経て、外濠の将来像の提案を行い、東京都知事への提言(2019年9月)へと活動を展開した。しかしコロナ禍で中断を余儀なくされ、オンラインでの情報共有やzoomによるセミナーを実施してきた。今年度は新型コロナウイルス感染症の5類移行により、対面イベントを再開する環境が整ってきたが、対面活動経験を持つ学生メンバーはすでに全員卒業しており、外濠に関する基礎的な知識やイベントノウハウ、近隣との関係性も継承できていないのが実情である。そのため、今年度は外濠市民塾の新たな体制による活動の試行と今後の活動計画の検討を行った。

2. 2023年度の活動概要

2023年度には8回の運営委員会を開催した。運営委員会では各種活動の報告・関連する外部イベント等の情報共有・今後の活動に関する意見交換等を行っている。学生は3つの

グループに分かれ、まちあるきチーム、Web運営チーム、水上利用チームとして活動した。

具体的な活動として、2回のまちあるきイベント、昨年度に不正侵入を受けて閉鎖中のウェブサイト再構築、外濠水上コンサート奏への支援を行った。さらに2024年度の活動計画を議論し、準備を開始した。その皮切りとして水辺に関する活動実績のある菅原遼氏(日本大学助教)をお招きして勉強会を開催する予定である(2024年3月)。

3. まちあるき活動

外濠市民塾の学生メンバーは年に数回のイベントを通じて研究者や他大学の学生との関係を構築し、外濠に関する知識を継承してきた。しかしコロナ禍により現在のメンバーのほとんどは研究室の上級生から担当を引き継ぐ形で実質的な活動ができていなかった。この状態を打開するため、学生主体で外濠周辺のまちあるきを行い、外濠とその周辺の状況を観察し、事後に意見交換を行って知識の共有を図った。

第1回まちあるきは2023年8月19日に実施し、15名が参加した。対象地域は外濠の北西側であり、事前学習を踏まえて学生が自由に訪問先を決めて歩いた。終了後、法政大学

新見附校舎に集合して写真の共有や振り返りを行い、外濠周辺で発見した地域の魅力などについて共有した。

第2回まちあるきは2023年12月17日に実施した。対象地域は飯田橋から秋葉原にかけての神田川周辺とした。外濠周辺の企業が構成員である外濠水辺再生協議会から参加者を募り、合計で20名弱が参加した。まちあるき終了後、過年度に作成した「おぼんカウンター」を使用して外濠公園で昼食をとり、法政大学市ヶ谷田町校舎で振り返りを行った。

4. 外濠水上利用

牛込濠を利用した水上コンサート「奏」は、2007年以来、学生が中心となって外濠を舞台とした水辺利用の可能性を社会に発信してきた。外濠市民塾に参加する学生と「奏」の運営に携わる学生の多くは重なるものの、学生の主体性尊重と外濠の複雑な社会的位置づけから、「奏」は学生による奏実行委員会による主催となっている。今年度の奏実行委員会は法政大・東京理科大・東京工業大・日本大・東京都立大学の11名の学生により構成されている。

第13回水上コンサート「奏」は2023年9月5日にCANAL CAFEを会場として開催された。クロスオーバー研究会(慶應義塾大学)、UCHINOUE、二部モダンジャズ研究会(法



図1 第1回まちあるきの様子

政大学)による演奏が行われ、外濠クイズ&アンケートも実施された。

外濠市民塾としては、地域の商店会の窓口やキーパーソンを紹介するなど、学生と地域コミュニティとの接点を作り、「奏」の活動の存在や意義を知っていただき、外濠を舞台とした「奏」の活動を通じて学生と地域コミュニティが相互につながっていくための支援を行った。

5. 2024年度の活動計画

2024年度は、対面でのイベント開催をベースとした外濠市民塾のプラットフォーム機能を再構築し、プログラムを再活性化させる。外濠や水辺に関する勉強会の開催、レクチャー・まちあるき・振り返りをセットにした外濠市民塾イベントの開催、将来像の提案や外濠を楽しむ活動の実践へと活動を拡大していく。数十人にのぼる外濠市民塾学生メンバーの卒業生を集めて「外濠市民塾OB・OG会」を開催し、人的ネットワークの強化を行う。

また年度ごとに活動を取りまとめ、展示やマップ、あるいは「外濠四季絵巻2036」の加筆などアウトプットを意識し、活動実績が目に見える形で蓄積されていく仕組みを目指す。



福井恒明

法政大学デザイン工学部教授

1970年東京都生まれ。東京大学工学部土木工学科卒、同大学院修士課程修了。博士(工学)。清水建設、東京大学、国土交通省国土技術政策総合研究所などを経て2012年法政大学デザイン工学部准教授。2013年より同教授。専門は景観工学。編著書に『景観用語事典』、『コンパクト建築設計資料集[都市再生]』『水都学V』など。千代田区などの景観行政、葛飾柴又・四万十・佐渡の文化的景観に関わる。

5

Project 5
イタリア大使館庭園プロジェクト

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学博士後期課程在籍 畠山望美

シンポジウム「イタリア大使館に受け継がれた江戸の大名庭園—調査プロジェクト報告会—」
開催日:2023年7月20日(木)
場所:イタリア文化会館ホール

港区三田の高台に位置する在日イタリア大使館は、伊予松平隠岐守の中屋敷跡を受け継ぎ、湧水による池泉回遊式庭園の美しさを今なお留める貴重な場所である。明治期には松方正義邸となり、昭和のはじめにイタリア大使館が継承し、時代の層を重ね、歴史的かつ文化的に高い価値を誇ってきた庭園であるが、近年は水環境の状態も悪化し、池を中心とする庭園全体の管理の上でも色々な問題を抱えていた。2021年秋に着任されたジャンルイジ・ベネデッティ駐日イタリア大使は、東京が誇るこの歴史的庭園の魅力を甦らせたいという強い意志を抱かれ、この庭園の歴史的・文化的な価値を明らかにするとともに、庭園のランドスケープの本来の姿を取り戻すための総合的な調査研究のプロジェクトを提案された。こうしてイタリア大使館からの依頼を受け、法政大学江戸東京研究センターと東京農業大学造園科学科のメンバーが合同する形で調査チームが編成され、2022年1月から、

建築史・都市史、庭園史、ランドスケープ、水環境・水循環、生態系(樹木・植生、水中生物)などのさまざまな分野を横断する学際的な研究チームのもとで、大使館の庭園の全容を包括的に解明する調査に取り組んできた。本シンポジウムは、そのプロジェクト報告会として開催した。

まずシルヴァーナ・デマイオ氏(イタリア文化会館館長)よりご挨拶があり、日伊の交流の歴史と本庭園の魅力が語られ、日伊交流の更なる発展に向けて本プロジェクトへの期待が示された。次にジャンルイジ・ベネデッティ氏(駐日イタリア大使)からは、本庭園がこれまで歩んできた歴史が紹介され、1987年から1991年の4年間に職員として勤務していた当時の庭園の記憶と現在の庭園が抱える様々な問題点に対して、このプロジェクトを始動した思いを語られた。今後は一般公開に向けて、庭園の本格的な修復のためにFAI(イタリア環境基金)にもご支援いただき、環境整備を進める計画が示された。また、本プロジェクトのアウトプットの一つとして「恵露閣」の3Dモデルを作成したイタリア考古学民族国際研究センターのメンバーが来日し、現在も考古学の視点から調査を継続していることも報告された。



畠山望美

1995年千葉県生まれ。法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程修了。現在は同大学博士後期課程在籍。専門は江戸東京の庭園史・都市史。近代の大名庭園の利用・転用について水系や地形に着目し研究している。2020年にヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で行われたシンポジウム「Tokyo and Venice as Cities on Water Past Memories and Future Perspectives」で報告をし、その成果をまとめた『ETO S叢書3水都としての東京とヴェネツィア』(法政大学出版局、2022年)に掲載。



続いて陣内秀信氏(法政大学名誉教授、特任教授、法政大学江戸東京研究センター・エコ地域デザイン研究センター特任研究員)より、このプロジェクト発足の経緯と調査のプロセスが説明された。

研究成果報告は、歴史、水環境、造園の3パートと最後に和船プロジェクトの報告があった。

歴史からは、まず内藤啓太氏(法政大学デザイン工学部建築学科教務助手/法政大学江戸東京研究センター兼担研究員)より、江戸の大名庭園の分類や立地する地形によって多様な水利用がされていたことを紹介しつつ、伊予松平隠岐守中屋敷の江戸後期の屋敷絵図から庭園の特徴と国元である松山の庭園との類似性が示された。そして、江戸後期の絵図に見られた庭園内の施設や藤棚、堤は現存しないが、回遊の園路や池の地割・築山は現在も残り、それらがイタリア大使館庭園の基層構造を築いていることが指摘された。

続いて畠山望美(法政大学大学院デザイン工学研究科博士後期課程)からは、史料や古写真、現地調査より、明治初期に土地が分譲され、大名屋敷の庭園部分がそのまま現在のイタリア大使館の敷地となっていることが示され、明治期から現在に至るまでの庭園や建築の変遷が明らかにされた。近代以降は、各所有者が江戸の大名庭園を継承し、歴史性を尊重しながら改変した東京でも類をみない庭園であることが示された。

水環境は神谷博氏(法政大学江戸東京研究センター・エコ地域デザイン研究センター客員研究員/NPO法人雨水まちづくりサポート理事長)より、イタリア大使館敷地の水環境総合調査として、地形・地質、水系及び水循環、敷地雨水循環、生態系の4項目の調査報告があった。各調査結果とともに



現在の庭園の問題点が示され、次の4つの解決策が提案された。①水循環システムにおいても歴史的価値が認められ、当初設計の雨水システムは今日的なグリーンインフラの思想に通じるものがあり、当初のシステムをできる限り復元する計画である。②庭園管理の不備により池のヘド口の堆積が進んでおり、一定程度は除去する必要がある。除去方法は継続的に良い環境が維持できる方法を探る。③雨水システムがある時期から改変されてうまく機能していないため、これを改善し、降水量の増加に対しても対策をとる。④これまでは閉鎖性の高い環境が維持されていたが、庭園の修復の必要があるため、生態系に配慮した方法を用いる。

造園の分野からは、まず栗野隆氏(東京農業大学地域環境科学部造園科学科教授)より、庭園の池泉護岸に関して、工法による分類とその損傷状態、そして保存・修復に向けた提案が示された。イタリア大使館庭園は、わが国に発達した伝統的な護岸工法を今に伝える現存事例として極めて貴重なものであり、改修・修繕時においても現代工法を用いず、伝統的な土居木による施工を実施するべきであると指摘した。次に、張平星氏(東京農業大学地域環境科学部造園科学科准教授)からは、庭園の石材についての報告があった。伊豆半島や真鶴半島から採取された安山岩の自然石を庭園の骨格として、花崗岩の石造物を多く配置され、関東圏の江戸時代～近代の庭園に多くみられる石材構成である一方、要所に鞍馬石・青石・井内石・佐渡赤玉石・太湖石など独特な庭石が配置されていることと、石造物の造形が多様であることが特筆すべき点であり、江戸後期～近代の関東圏の石材流通を研究するための重要な資料となると述べた。今後の整備に向けた課題としては、滝石組が風雨に晒され、鮮やかな色彩を発揮していない点や、石造物の移設が多く本来の



位置が特定しにくい点、一部の石造物の石材劣化が進んでいる点を指摘した。

最後に、田中聡氏（東京農業大学地域環境科学部造園科学科准教授）、金澤弓子氏（東京農業大学地域環境科学部造園科学科准教授）からは、樹木（高木及び低木）並びに地被植物について報告した。特に大使館に見られた巨木については、イチョウが江戸後期の絵図に見られる祠（稲荷大明神）と関係性がある点やクスノキが松方正義の出身地である薩摩（鹿児島）の特産品である点、アジサイは旧大使館（裏霞ヶ関）に植栽されたものである可能性を指摘した。イタリア大使館の庭園は1932年からの91年間、日本の治外法権下にあったため、都市開発の圧力や、わが国で一般的とされる管理を受けることがなく、結果として、江戸及び明治時代の植物等が思いがけず保全されたことが考えられるとした。

和船プロジェクトについては、陣内氏より、明治期の古写真に写った池に浮かんでいる和船を見たジャンルイジ・ベネッティ大使の「かつてのように和船を池に浮かべたい」という夢のようなプロジェクトの報告があった。伝統的技術で造られた和船を探し、東京ベイエリアで使用していた和船を譲り受け、運搬し、和船の棟梁のご子息に遠方から修理に来ていただき、池まで人力で運び、進水式が行われ、さらに権の寄贈があり、大使館の池で和船を櫓で漕ぐ夢が実現した様子を紹介した。多くの方にご協力によって池に浮かべられたこの和船が今後も活用されることに期待を示した。

最後のパネルディスカッションでは、陣内氏の司会のもと、歴史から畠山、水環境から神谷氏、造園から栗野氏、そして庭園の改修に向け、ランドスケープアーキテクトである戸田芳樹氏（株式会社戸田芳樹風景計画）が登壇した。まず戸田氏



より、ランドスケープアーキテクトの視点から、庭園を修景ゾーン・開放ゾーン・閉鎖ゾーンの3つのエリアに分けた景観ゾーニング図と、視点場やポイントとなる石や灯籠、築山を結んだ景観構成図が示され、この庭園の魅力と問題点が指摘された。改修に向けて、訪れる人々を庭園全体へ誘導するため、園路・広場を追加する提案がされた。登壇者からは、ベネッティ大使の庭園への情熱と調査に参加されて日々観察・研究し続ける姿勢に敬意が表された。また、すでに育ち過ぎている樹木の伐採や水環境などの整備を進めていることが紹介された。これまで日伊双方によって継承されてきた江戸東京に残る価値のある庭園を守り続け、更なる魅力を引き出すべく、今後の期待が高まるシンポジウムとなった。

6

Project 6

国際共同研究 「Edo Castle Mission」

法政大学デザイン工学部教授、プロジェクトリーダー 高村雅彦

本研究は、令和4・5年度「公益財団法人鹿島学術振興財団（国際共同研究）」の助成を受け、法政大学江戸東京研究センターとイタリア・ナポリに拠点を置く考古民族国際研究センターが共同して、江戸城とその周辺の市街地に関する都市、城壁、内堀、建築、庭園の復元図面を作成し、それをコンピュータグラフィックスの3Dモデルで総合的に表現することを内容とする。建築史・都市史の成果に現代的な技術を応用し、一つの作品としてより高度な視覚的表現の研究成果として世界に広く発信することは過去にほとんど例がなかったと言っていいだろう。こうした新たな一連のアプローチを通じて、それを実現しようとする点で独創的かつ先駆的な研究といえる。令和4年度はコロナ禍の影響により、現地調査をうまく遂行することができなかったため、急ぎよ在日イタリア大使館の庭園に関する調査をおこなった。従来の調査メンバーに加えて、東京農業大学の栗野隆教授をはじめとする庭園の専門家、またイタリア・パヴィア大学のオリンピア・ニーリオ教授、そしてイタリア大使の全面的な協力のもと、その建築及び庭園の歴史的価値を確認し、復元図面の作成や一般公開に向けた整備に向けて地図、写真、建築や庭園の配置図、建築図面、水道配管図などの史料を日伊双方から収集し、充実した

調査研究を進めることができた。その内容は法政大学江戸東京研究センター編・陣内秀信監修「在日イタリア大使館庭園調査報告書（令和4年度）」（法政大学江戸東京研究センター、2023年5月）として刊行し、またシンポジウム「イタリア大使館に受け継がれた江戸の大名庭園—調査プロジェクト報告会—」（イタリア文化会館ホール、2023年7月20日）を開催し、広く成果を公表している。

その後、令和5年度により自由な調査できるようになり、江戸城復元に向けた本格的な研究が開始される。2023年6月13日に法政大学にて日本工業大学名誉教授で江戸城研究の第一人者である波多野純教授から多岐にわたる視点を研究会という形でご教示いただき、続く6月29日にはイタリアの主要メンバーが来日し、これまでの成果と今後の方向性について国際会議を実施した。それを受けて、まずはEToS側で江戸城本丸に関する膨大な資料を読み込み、それをCADによって図面化し、11月にイタリア側へ送り、2024年1月現在CG作成に取り組んでいる。同月16日、17日には、今度は陣内と高村がナポリに向かい相手側と進捗状況や問題点について議論する予定になっており、今後の進展をぜひ期待していただきたい。



高村雅彦

1964年北海道生まれ。法政大学大学院博士課程修了。2008年より法政大学デザイン工学部建築学科教授。専門はアジア都市史・建築史。1999年前田工学賞、2000年建築史学会賞を受賞。2013年上海同济大学客員教授。主な編著書に『水都学Ⅰ～Ⅴ』（法政大学出版局、2013年～2016年）、『タイの水辺都市—天使の都を中心に—』（法政大学出版局、2011年）、『中国江南の都市とくらし—水のまわりの環境形成』（山川出版社、2000年）などがある。

7

Project 7

東京発掘プロジェクト2023／
千代田レジェンド・リノベーション

「まちを博物館に!」～千代田レジェンド・リノベーション

法政大学大学院デザイン工学部非常勤講師・江戸東京研究センター客員研究員、研究代表者 皆川典久

東京の地下には歴史的遺構が数多く眠っている。そうした遺構を仮想的に掘り起こし、現代都市の中に位置づけ、再定義によって都市の将来像を模索する野心的な試みを「東京発掘プロジェクト」と称し、法政大学大学院デザイン工学部の受講生と共に5年間活動を続けてきた。今回は千代田区を対象エリアとし、歴史的遺構を体現できる「場」をアピールするために「まちを博物館に!」を表題に掲げ、分野横断的な研究と提案を試みた。本稿では千代田学のテーマのひとつである「ウォークアブルなまちづくり」の実現に寄与できる「千代田レジェンド・リノベーション」の取り組みを紹介する。建築学や都市計画学を専攻する研究者による、具体性があり実現も可能な「提案」をきっかけに、都市の将来像に関する議論が深まることを願う。

それでは研究プロジェクト2023年度の主旨と目的、そして活動内容について詳細に報告しておきたい。「東京発掘プロジェクト」で取り上げてきた「歴史的遺構」とは、江戸城の城壁や痕跡、そして川や運河など水路の遺物を指している。それらは江戸東京の歴史や文化を語る証人のような存在である。NHKのテレビ番組『プラタモリ』では、そうした遺構を街

角に見出すことで、その町ならではの歴史や文化を紐解いてゆくといった番組構成がよく用いられている。暗渠や橋跡などの発見を通じて川が存在を再確認し、そこから紡がれた人の営みを読み解きながら、その町独自の記憶を呼び起こす手法で番組は進行する。それによって地元の人たちが「何にもない」と揶揄するような町でも、必ず土地固有の先人たちの営みがあり、それに気づかされることで地域愛を育むきっかけになっていると思う。現代都市に埋没している歴史的遺構の価値が再認識されているのだ。

さて、「東京発掘プロジェクト」が注目してきた江戸城の城壁とは、内堀や外堀そして見附などの歴史的な建造物のことであるが、近代になって破却されたものが多いものの、現代の東京の街角に何気なく残置あるいは埋没されている箇所がある。かつては水を湛えた堀から立ち上がる石積の堅固な城壁や見附がいたる所に構えられていた。東京の都心部は、世界でも最大級だった江戸城を下敷きに建設されているのだ。「東京発掘プロジェクト」が注目する水路の遺物については、水路の存在そのものに加えて、橋跡や暗渠などの痕跡や水路の護岸壁に焦点をあてている。中でも石積み護岸の場合、水路そのものが失われたとしても、自分たちの住む町の足元



(画像1: 中央区のマンション工事現場で発掘された新川堀の石積み護岸)

に人知れず埋まっていることがある。江戸東京はかつて「水の都」と称され、縦横に水路や運河が張り巡らされ、舟運が都市の経済活動を支えていた。まさにベネチアのような水と共に暮らす豊かな風景がこの地に存在したのだ。近代化のなかで輸送の主役が鉄道や自動車などの陸上交通へと置き換えられ、舟運の必然性が相対的に低下する中で、関東大震災あるいは戦後の復興処理の際、瓦礫や焼土の捨て場所として水路は埋め立てられてしまった。けれども緊急的対応だったゆえ、石造りの護岸は破壊されず、元の姿のまま土中に眠っている場所が多い。掘れば石積み護岸は出てくる可能性が高いのだ。

昨年のフィールドサーベイの際、中央区のマンション建設工事の地下掘削工事で、新川堀の石積み護岸が発見された。この界限は江戸湊の中心的な場所で、「新川の下り酒」として有名だった灘・伏見から船で運ばれた酒が荷揚げをされた河岸のあった地なのである。発見された石積み護岸は、ほぼ原形を留めていたが、残念ながら一通りの調査が行われた後に、マンション建設工事で失われてしまった。(画像1)

同様に、高輪ゲートウェイ駅周辺の再開発掘工事の際、明治期の築堤が土中から発見され、JR東日本は竣工の時期を遅らせてまでも計画の抜本的見直しを行った。鉄道遺構としての高輪築堤は、関係者のみならず一般市民の間でも話題となり、その価値が再認識され一部保存に至った事例として記憶に新しい。JR東日本は新しい計画案を示し「高輪築堤など鉄道技術が日本の近代化とイノベーションを牽引した」とし、「先人の偉業を国内外の来場者に体感してもらえる場にしたい」と発表した。(画像2)

これらの出来事によって、自分たちは「東京発掘プロジェクト」の意義を再認識し、「お宝」発見のモチベーションに繋



(画像2: 発掘された高輪築堤を一部保存(復元)するよう見直された実施案(JR東日本発表))

がったことは言うまでもない。上記2件の発掘現場は、地下に埋もれている歴史的遺構のほんの一部に過ぎない。多くの「お宝」が人知れず、静かに発掘される時を待っているのかもしれないのだ。

その「東京発掘プロジェクト」2023年度は、千代田学の研究プロジェクトとして「まちを博物館に!～千代田レジェンド・リノベーション」をテーマに掲げ、歴史的遺構(レジェンド)の再生(リノベーション)を目指し、千代田区内に眠る遺構(お宝)掘り出しからスタートした。

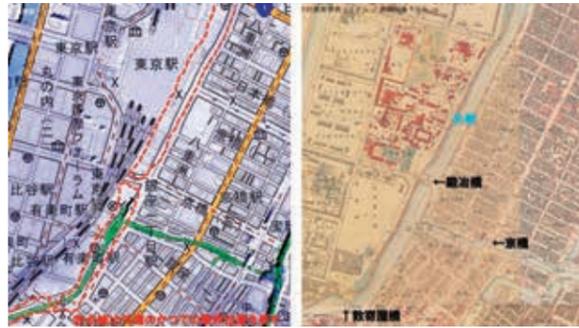
発掘のための基礎的研究としては、江戸時代に描かれた図版や絵図、そして明治期以降に製作された古地図を参照した。中でも1884年(明治17年)より参謀本部が作成した五千分一東京図測量原図が最も参考になった。測量図として信頼性が高いことと、江戸期に造られた江戸城をはじめ多くの水路網が、未だ健在の時期に描かれているためだ。古地図を参照すると、東京のまちは江戸期からその骨格が変わっていないことが理解できる。すなわち道路網や街区割は江戸期に整備された都市構造そのものなのだ。ただし「水の都」とも称された川や運河・堀などの多くは、近代化の過程で失われてきた事実を知った。社会的な事情の中で消失せざるを得なかったものも多い。研究者の間では、歴史的遺構を復活させる意義について賛否両論があったが、単なる懐古趣味に留まらず、地域資源として観光名所になり得るし、非常時の輸送路確保など都市マネジメント上の有効性にも着目し、未来志向で自分たちの研究を位置付けることとして議論を進めた。(画像3)

提案を行う候補地を数力所選択した後に、研究者みなで現地調査(フィールドサーベイ)を3回実施した。実際に現地に



皆川典久

1963年群馬県生まれ。東北大学工学部建築学科卒業後、鹿島建設建築設計本部に所属、現在にいたる。2003年には東京スリパチ学会を設立し、凹凸地形に着目したフィールドワークで観察と記録を続けている。2012年から4年間、東北大学非常勤講師として復興支援に取り組む。東京スリパチ学会の活動は2014年にグッドデザイン賞を、2023年には地域再生大賞優秀賞を受賞している。「タモリ倶楽部」や「プラタモリ」などのTV番組にも出演、今日の地形ブームのきっかけをつくった。特に「プラタモリ」では番組スタート時からアイデア出しを行い制作に協力している。主な著書に『凹凸を楽しむ東京「スリパチ」地形散歩』(宝島社)や『東京スリパチの達人・分水嶺北部編／南部編』(昭文社)など



(画像3:現在の地図(左)と明治17年の東京図測量原図(右)の対比)

訪れると、遺された歴史的遺構が現代都市の中では置き去りにされていることが分かる。本研究では現地調査を大切にしている。歩いてみることで発見の機会が得られ、調査を深度化させるモチベーションに繋がるからである。これら歴史的遺構を「まち自体を博物館に」と位置付ければ、ウォークラブルなまちづくりのための有効な手法になることも確認できた。(画像4、画像5、画像6)

現地調査から得た知見によって現状の問題点を抽出し、研究者の間で意見を交わした。歴史的遺構を再定義・再生すること(レジェンド・リノベーション)で問題の解決を模索するような「具体的提案」へと昇華させることを試みた。2023年度は受講した研究者を6つのチームに分け、研究対象エリアを溜池、外濠、日本橋川、道三堀とした。研究者は法政大学大学院デザイン工学部で建築学あるいは都市計画学を専攻する修士1年の学生を主軸に構成されたため、最終成果物である具体的提案は図面やスケッチ・CGパースなどの提出を



(画像4:千代田区で実施されたフィールドサーベイの様子)



(画像5:フィールドサーベイには研究者に加え、一般の人たちも参加した)

求めた。研究成果や具体的提案を広く知ってもらうためには、誰もが理解できるビジュアルが有効だと考えているからだ。言葉による提言に加え、具体的な将来像を示せば、より多くの人たちに自分達の試みを訴求できると考える。2024年1月20日、法政大学市ヶ谷田町校舎のマルチメディアホールにて、公開の成果発表会を行った。聴講には法政大学OBの方々や、一般の参加者など約60名の方々が来場した。その中で出された感想や意見を以下に記す。(画像7)

- ・何気なく暮らす街に歴史遺産があることをあらためて気づかされた
- ・水辺があれば広場のように人が集まり、銀座などのオーパーツリズムの問題の助けになるのではないか
- ・インバウンド向けにも現実的で有効な取組に思われる
- ・ヨーロッパの街とは異なる歴史の見せ方を考えさせられた
- ・水路は風情を楽しむだけでなく、非常時の輸送路として防



(画像6:霞が関コモンゲートで発掘復元された江戸城外堀の遺構)



(画像7:法政大学で行われた成果発表会の様子)

災の見地からも活用が望まれていると思う
 ・このような取組を千代田区以外でも行ってほしい

余談ではあるが、研究代表者の皆川典久は、2012年より東北大学大学院の非常勤講師として、復興まちづくり「仙台モデル」の提案を学生たちと取りまとめた。2011年の東日本大震災の被災地を調査し、20世紀に築かれた文化・文明のあり方も再考するに至った。将来像を模索する上でのキーワードは持続可能なまちづくりであり、注目したのが地形と水であった。時に禍をもたらす地形と水こそ持続可能な社会を考える上で、無限の可能性を持つ「恵」の存在であることを再認識し、具体性のある提案を模索した。潮力発電や微水力発電、河川水・地下水の熱利用、そしてライフスタイルの再定義など、近代のパラダイムを見直す研究成果は本研究でも今後活かしてゆけるかもしれない。

「まちを博物館に!~千代田レジェンド・リノベーション」という今回の研究によって、身近にあるのに忘れられている歴史的遺構(レジェンド=地域資源)を仮想的に掘り起こし、現代の都市空間に位置づけ再生(リノベーション)を仮定することで、まちを歩きながら歴史的資源に触れる場の創出を試みた。本研究に触発された方々が歩行者目線で住み慣れた町を再評価し、ウォークラブルなまちづくりへの関心度を高め、あるべきまちの姿を議論する場が生まれたらと願う。できれば今後はワークショップを行い、議論を深めながら提言の深度化を図ってみたい。研究成果はより広い視点そして専門的見地からの検証が必要となろう。産学官連携の多様で実践的な活動を生み出す契機となる事を願っている。

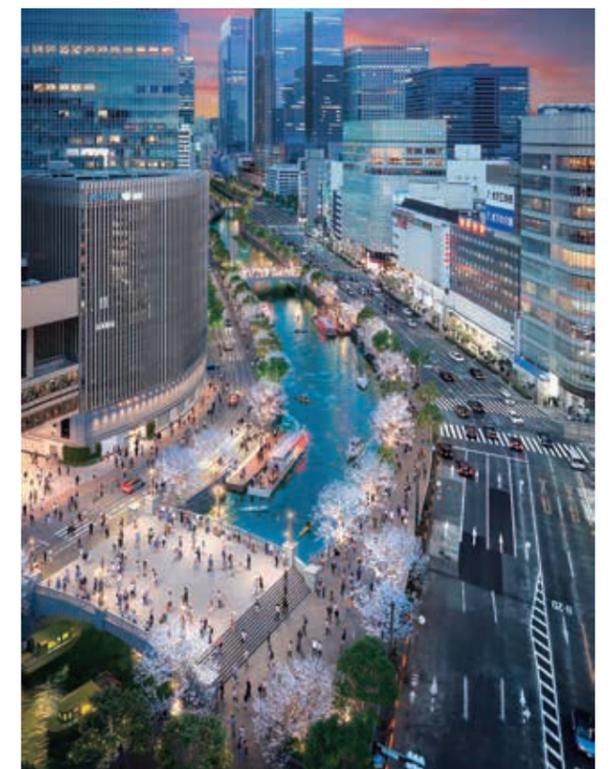
(画像8~画像10)



(画像8:江戸城建設には欠かせなかった道三堀を「シン・道三堀」として創出し、東京駅丸の内口前に船着場を設ける野心的な提案)



(画像9:東京駅八重洲口側に存在した江戸城外濠を復活し、舟運利用も想定した提案)



(画像10:外堀と数寄屋橋を復活し、銀座の街に新たな名所を創出する提案)

報告会

「江戸東京研究センター2022年度報告会」

開催日：2023年3月1日（水）

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー 26階 A会議室

2022年度報告会は、まず2本の調査研究報告から始まりました。畠山望美・内藤啓太両氏によって「イタリア大使館の建築と庭園」に関する報告があり、それはのちに法政大学江戸東京研究センター編・陣内秀信監修「在日イタリア大使館庭園調査報告書（令和4年度）」（法政大学江戸東京研究センター、2023年5月）として刊行されることになります。次に、高村研究室所属の中釜英里香氏から「江戸東京の用水と水車が担う都市の近代化」について詳細な報告があり高い評価を得ました。この内容は、法政大学江戸東京研究センター／エコ地域デザイン研究センター編・高村雅彦監修「江戸東京の用水と水車が担う都市の近代化」（法政大学江戸東京研究センター／エコ地域デザイン研究センター、2023年2月）として刊行されています。

続いて、2022年度に新たに再編された米家志乃布・福井恒明「地理情報システムと名所の景観」、高村雅彦・小林ふみ子「江戸東京の文学と都市史」、岡村民夫・山道拓人「表象文化と近未来デザイン」の三つのプロジェクトから報告がなされました。各プロジェクトの方向性だけでなく、プロジェクト相互間の関連性と一体性、また研究資金調達の方法など、議論は多岐にわたりました。センターの未来を見据えて、いかに充実した研究を推進していくかが議題となり、EToSの新・江戸東京研究の世界をより積極的に切り開こうとする姿勢が参加者全員で確認され会を終了しました。

（高村雅彦）

シンポジウム

「関東大震災100年 大地震と都市空間～過去に学び、近未来を描く」

開催日：2023年10月21日（土）

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 富士見ゲート棟 4階 G401教室（対面開催のみ）

2023年10月21日（土）午後、法政大学富士見ゲート棟G401教室において、法政大学地理学会と法政大学江戸東京研究センターの共催で、シンポジウム「関東大震災100年 大地震と都市空間～過去に学び、近未来を描く」が開催されました。

2023年は、「関東大震災」という大地震とそれによる災害が起きてから100年になります。そのため、日本各地で関東大震災を振り返る様々なイベントが行われています。この100年の間、日本とりわけ東京は大きく変貌してきました。そして、まさに現在進行形で大規模な開発が進んでいる状況でもあります。高層ビル、住宅、店舗の立ち並ぶ賑やかな東京の街を見ると、かつての大災害ははるか昔のことに感じます。そして、多くの人々の記憶からは、忘れ去れている出来事なのではないでしょうか。本企画では、法政大学地理学会と協力し、改めて、東京における過去の災害とその復興過程、当時の人々の想いを振り返り、大地震と都市空間の関係を考える企画をもうけました。

まず始めに、法政大学地理学会副会長の中村圭三氏から開会の挨拶がありました。次に、法政大学江戸東京研究センター長の米家志乃布氏（法政大学教授）による江戸東京研究センターの紹介がありました。

基調講演として、法政大学江戸東京センター特任教授である陣内秀信氏より「「関東大震災と東京の復興－建築・景観・思想・コミュニティ」と題してお話がありました。1980年代、東京の街を徹底的に歩き、当時の街の状況をつぶさに調べた経験を踏まえながら、関東大震災後の復興事業によってつくられた空間や都市景観が、いかに公共性や都市美に優れていたか、多くの当時の写真などをもとに説明されました。震災復興において区画整理は重要な事業の一つでした。その過程で、本来の土地に居住するために多くのバラックが建設されます。また、防災用の小公園を東京市内各地に整備します。東京の都心を中心に、鉄筋コンクリートの小学校を建設し、小公園はそこに併設します。隅田川に架かる橋梁も新し

くなります。とにかく、それらすべては、震災後における東京の復興景観の特徴でもありました。さらに、震災復興の事業として有名な同潤会アパート建設は、コミュニティを大切に、その土地やその場所の社会的性格や雰囲気などと絡めてそれぞれのタイプが決められ、行われました。陣内氏がピックアップした豊富な写真や資料をもとに、震災復興事業の思想、手法、デザイン、都市美、公共性、公益性、コミュニティの意識、などが語られ、当時の人々の考え方には、「家に住むだけではなく街に住む」というスピリットがあったことが述べられました。

続いて、シンポジウムのプログラムにはいります。法政大学地理学会集會委員長の小原文明氏（法政大学教授）による司会のもと、3人の報告者による研究発表が始まります。

まず1人目の穴倉正展氏（国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター・連携推進室内連携グループ研究グループ長）は、地震学の立場から、これまでの歴史地震研究を踏まえ、「地形、地質、歴史記録からみた関東地震の履歴と将来予測」と題して報告がありました。本報告では、関東震災・地震のメカニズムについての詳細な解説のあと、歴史記録による関東地震の履歴を復元する作業がどの程度まで行われているのか、が説明され、さらにこれらの作業がまさに将来予測につながっていくことが提示されました。関東地震にはプレートが沈むときと割れるときに起こるものがあります。プレートが沈み込むかたちでの関東地震の頻度は、200年ちょうどで地震は繰り返すのか、あるいは400年とばらつくかという推測の両方があるものの、これまでの穴倉氏達のチームによる津波の堆積物や地形・地層についての研究成果によれば、400年という見解であることが示されます。一方で、首都直下型の地震は、プレート自体が割れるかたちでの地震であり、関東の地下にあるプレートは3枚も重なって複雑なため、いつどこで起こるかかわからないことから、予測がたてづらいことも述べられました。つまり、マグニチュード7クラスの首都直下地震は頻発する可能性があるということで話は締めくくられています。

つぎに日本経済史の立場からの報告です。鷲崎俊太郎氏（九州大学経済研究院准教授）による「関東大震災と丸の内・内幸町－東京経済と三菱における地所経営の変容」では、三菱による内幸町（現在の新橋から有楽町の間）の貸地貸家業について、震災前と震災後の変容について論じられま

した。まず、日本経済史では、1910年代の大戦バブル景気と1929年の世界恐慌以降の昭和恐慌の話が重要であり、同時代の関東大震災そのものについては、大きなインパクトとしては論じられない傾向にあることが述べられます。とはいえ、東京の産業を考えると、金融・サービス業が中心であり、その点のインパクトは相当あったのではないかと、また、東京の大土地所有者を見ると旧財閥系が上位にあり、関東大震災前後の丸の内の開発の担い手であった三菱の動向をおさえることは重要なことであることが、本報告では示されました。具体的な分析としては、関東大震災における火元のひとつとなった内幸町における地代と地価の変遷、震災後の土地の売却、不動産額としての上昇ということが三菱家の一次史料をもとに考察されました。これにより、関東大震災後の1920年代後半は、東京の大土地所有者にとって、まさに土地の売り時であったということが結論づけられます。

さらに表象文化論の立場から、岡村民夫氏（法政大学国際文化学部教授・江戸東京研究センター兼任研究員）による「故郷喪失から新たな故郷へー芥川龍之介、堀辰雄、立原道造の関東大震災経験」と題された報告が行われました。関東大震災に関しては、多くの文学者が経験し、すぐに様々なことを書いています。そのなかでも、下町生まれで罹災した文学的に師弟関係のある芥川龍之介・堀辰雄・立原道造の3人が、関東大震災をどのように経験し、その後どのように震災復興を生きたのか、という点に絞ったものでした。岡村氏は、立原道造の人生について詳細な著作を発表しており、今回の報告でも、立原の震災経験に最も重点のおかれた話になりました。立原は、東日本橋の立花町で生まれ、そこで罹災します。その後も、看板建築の自宅二階にある屋根裏部屋で過ごしました。東京帝国大学工学部建築学科に入学し、卒業後も建築にかかわる仕事にもつきますが、24歳の若さで、病気により亡くなります。立原は、震災前の下町に愛着・ノスタルジーを感じていた一方で、積極的に、昭和モダンの代表ともいえる鉄筋コンクリート・RC建築を学んだ人物でした。しかし、岡村氏が報告において注目した彼の作品は、最晩年に浦和芸術村の一員として居住するために設計した住宅でした。片流れの屋根で木造、緑色の金属板が貼られたワンルームであり、この住宅のデザインは、震災後に東京市内に多く存在したバラックと同じであることが指摘されました。ここに立原の震災経験の具現化を見出すことになります。芥川・堀・

立原は、共通して、震災を通じた故郷喪失者となるのですが、それぞれの故郷喪失の在り方や対処の方法が大きく異なります。同じ震災経験でも個人によってその想いは様々です。このことは、現代の私たちにもつながる経験であるともいえるでしょう。

以上、3名の報告のあとに、それぞれにコメントがありました。宍倉報告にあったように、地震には様々なタイプがあり、とりわけ、首都直下型地震の場合は現在の科学では予測が難しいことが確認されました。その点を踏まえて、現在の私たちが生存率をあげるためには、ハザードマップ等を参照し、津波被害や土砂災害の少ない場所や耐震性能の保証された家屋に住むなど、日常的な生活の中で工夫していかなければならない、と前空英明氏（法政大学文学部教授）はコメントしました。

次に、米家志乃布氏が、鷲崎報告の興味深い点について解説いたしました。ひとつは、内幸町での罹災の具体的な分析はめずらしい点、2つめは日本の戦前の工業立地の点、3つめは震災の被害によって更地になってしまったことでのビジネスチャンスの点などが挙げられました。岡村報告には、同じく米家氏より、生粋の東京人ほど、震災前の東京を回顧してしまう、それは常に風景が変わっていく東京だからこそ、ノスタルジーが強くなるのではないかとコメントがありました。最後に全員での討論では、フロアからの質疑応答も含めて、多岐にわたり議論が展開いたしました。大変有意義な講演・報告、ディスカッションにより、本シンポジウムの目的である、「過去の東京を学ぶことで近未来の東京の在り方を問う」ことができた企画であるといえるでしょう。対面開催のみとなりましたが、開催当日には多くの方々に会場に足をお運びいただきました（参加者総数約80名）。心より御礼申し上げます。本シンポジウム登壇者皆様によるご講演・ご報告の原稿は、法政大学地理学会『法政地理』第56号（2024年3月刊行）の「シンポジウム特集」にも掲載される予定です。そちらも合わせてご覧いただければ幸いです。（米家志乃布）



研究会

「東京と小説を考える 東京小説家・山崎修平氏を囲んで」

開催日：2023年12月16日（土）

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 大内山校舎5階Y505教室（対面開催のみ）

山崎修平氏（1984年、東京都生まれ）は、『ロックンロールは死んだらいいよ』（思潮社、2016年）、『ダンスする食う寝る』（思潮社、2020年、第3回歷程新鋭賞）を出したのち、長編小説『テーゲベックのきれいな香り』（河出書房新社、2022年）を刊行し、続けて小説『愛がすべて』を『新潮』（2023年5月号）に書き下ろした新進気鋭の詩人・小説家・評論家であり、詩集においても小説においても縦横無尽に東京の各所を記している。かつまた法政大学大学院人文科学研究科に在籍する西脇順三郎研究者でもある（開催当時）。そこで、詩・短歌・小説というジャンルを自由に往き来する実験的東京小説『テーゲベックのきれいな香り』を中心に、ご自身の東京小説や、東京に対するスタンス、他の都市文学との関係などについて講演してもらい学びの場を設けた。

講演は、書き方や話法の問題からはじまった。記憶の捏造を伴いながら一人称で過去を語るという企ては、現代短歌におけるフィクショナルな一人称の導入、現代詩における「非私、反私」の導入や「あなた」の拡大と連続している。『テーゲベックのきれいな香り』の執筆の場合、フィクショナルな私小説を架空の人物「虎子」が書きなおす話、として初稿が成立したのち、「虎子」が暴走して当初の想定から逸脱した奔放な展開となったという。コロナ禍に執筆したことも、近未来に東京を大地震が襲うという設定に影響したそうである。

後半は、主に山崎氏の東京体験や東京観が話題となった。東京は非常に起伏の多い都市であり、その坂道を歩いた経験が身体的記憶として残る。一方で東京は頻繁に再開発され、平坦化・均質化が進みつつある都市でもある。景観の激変は「私とは何者だろう」という問いに行きつく。ちなみに山崎氏は高校中退後、読書と東京散策の日々を過ごしたとのこと。

最後に、山崎氏は『テーゲベックのきれいな香り』の数ページを見事に朗読した。参加者の多くが、この小説が詩人による小説であり、ここでは言葉の響きやリズムが非常に重要な価値を帯びているということを実感したのではないだろうか。

コメントーターの岡村民夫（表象文化論）は、『テーゲベックのきれいな香り』を読んで、第二帝政期にパリ県知事オスマ

ンによるパリ大改造でパリの激変を経験したボードレールが、『悪の華』や『パリの憂鬱』で都市批評をはらんだ詩を多く書いたことや、1920～30年代、アラゴンやブルトンなどのシュルレアリストが、パリのレトロな場所や歴史の断面がかいまみえる場所に靈感を得ていたことを想起した、と感想を述べた。また「我善坊谷」（麻布台1丁目から虎ノ門5丁目にまたがる谷）が詩と小説に繰り返し印象的に登場する点に注目し、永井荷風の麻布転居の一因が我善坊谷の眺めであったことや、荷風が芸者を我善坊町に囲った逸話を紹介、近日オープンする「麻布台ヒルズ」によってその地形自体が消滅したことと言及した（フレイヤーに利用したモノクロ写真は岡村が撮った麻布台ヒルズである）。

もう一人のコメントーターの山道拓人（建築学）は、『テーゲベックのきれいな香り』に関して事前復興としての詩の可能性を指摘した。事前復興というのは、今後起きる震災において被災が予想される箇所に対し、あらかじめアラートを出し対策を立てる手法である。『テーゲベックのきれいな香り』は日本（東京）でこれから起きる震災後、というタイムラインの設定がある。現在ある風景に対して筆者が言葉のかぎりを尽くすことは、風景のニュアンスを含めた記憶を保存することに他ならず、詩が持つ機能的側面に可能性を感じ言及した。

シンポジウム

「島からみる江戸東京～交流・広がり・領域」

開催日：2023年12月23日（土）

会場：法政大学市ヶ谷田町校舎5階マルチメディアホール（オンライン併用）

2023年12月23日に開催された、江戸東京研究センター・シンポジウム「島からみる江戸東京～交流・広がり・領域」は、当センターの研究プロジェクトにおいて、江戸東京の島嶼部（今回は特に伊豆諸島）を取り上げる最初の機会となりました。念頭にあったのは、島と都市を「関係性の連鎖」として捉えることができないかという問題意識です。

一般的に「島」というと、内地や都市とは様々な面で異なるという“差異”が強調される一方で、そのつながり方それ自体が問われることはそれほど多くはありません。しかし、異なるがゆえに相互に補い合う、またあるいは隔てられているからこそ併存できる、というように、相対的な「違い」や「個性」が生み出す“つながり”もまた、「島」の持つ重要な側面と言えるのではないのでしょうか。単純な二項対立図式を超えた、「交流」「広がり」そして「領域」のかたちを描き出し、江戸東京のイメージをより豊かに広げていくことが目的でした。

そこで今回のシンポジウムでは、江戸東京と深いかかわりを有する伊豆諸島を題材として、島に関する研究や実務に携わってこられた8名の方々に発表をお願いしました。まず、基調講演として田中優子氏にご登壇いただき、中近世期における東アジアと江戸を題材として、グローバルな視座から大陸や都市に付随する島の歴史的な性格が示されました。特に島が本来的に「外」でありながら同時に対外的には「入口」でもあるという指摘がなされ、都市と島の関係性を捉える重要な枠組みが提示されました。

続いて各報告の前半では、まず米家志乃布氏から、伊豆諸島を描いた各時代の地図資料を用いて、江戸東京における島の位置づけの変遷について報告がなされました。続いて、高道昌志氏からは、伊豆大島の波浮港集落の近代化について報告があり、島の景観や生活様式の形成に都市東京からの視点や再評価の機運が強く影響したことが示されました。金谷匡高氏は新島のコーガ石産業と集落景観の関係についての報告を行い、固有の資源を用いて島独自の景観が生み出されていく過程が紹介されました。前畑明美氏の報告では、島が同質化（架橋時代）の時代を向かえた現在の状況を批判的に捉え、古代の神津島に築かれていた内地との相互

ネットワークを踏まえつつ、いまいちど島のネットワークの在り方を再考する意義が説明されました。岡村民夫氏は、昭和初期における宮沢賢治の伊豆大島訪問の背景とその意味について報告を行い、それが島の園芸産業が発達していくひとつのきっかけとなった可能性を指摘しました。



さらに後半では、まず歌川真哉氏が報告を行い、八丈島において酪農産業の再生に取り組んだ経緯や、内地とは異なる島の固有性の価値や観光業の可能性について言及されました。最後の報告となった倉本栄治氏からは、訪問者（ツーリスト）の視点から、伊豆諸島それぞれの個性と魅力、またそこで体験できるアクティビティや交通事情などを紹介し、東京から見たときの伊豆諸島の多様性について紹介がなされました。各報告の終了後、報告者全員でディスカッション（司会：高道）を行いました。すべての報告を踏まえ、改めて東京と島の関係性をどのように捉えることができるか、各報告者にコメントをいただきました。特に重要な指摘として、現在は伊豆諸島の産業や意識が都市東京に集中しているように見えるが、かつては島同士の相互のつながりがあったことを踏まえ、そのようなイメージで現在の伊豆諸島を捉えなおすことの意義が指摘されました。また会場からのコメントとして、国際比較の中で都市と島の関係性を捉えることの重要性や、島固有の産物やその現代的な価値を積極的に発信することの重要性についても指摘がありました。

今回のシンポジウムは島を題材とする初めての試みであった

ことから、明確な答えが得られたわけではありませんが、島の固有性が持続し、より良い方向へ変化していくためには、都市との関係性だけでなく、群島としての相互の関係性を再評価することが不可欠であることが確認されました。特に、都市にとって「島」という存在がどのような意味を持つのかについては、比較的な視点を導入することで、他の地域や国との関係性を考えていくことが必要であるといえるでしょう。今後も引き続き、地域ごとの特性や相互の連携を理解し、より持続可能な未来への洞察を深めていくことが求められます。



（高道昌志）

シンポジウム

「ヴェネツィア国際シンポジウム報告」

開催日：2024年1月11日（木）～13日（土）

場所：イタリア・ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学

EToSの国際交流にとって、ヴェネツィア「カ・フォスカリ」大学と共同で開催する国際シンポジウムの果たす役割は大きい。新型コロナウイルス感染症のパンデミックが始まる直前の2020年1月に、EToSメンバー10名がヴェネツィアを訪ね、カ・フォスカリ大学で第一回のシンポジウムが開催され、その成果は、日本語では『水都としての東京とヴェネツィア—過去の記憶と未来への展望』（法政大学出版局、2022年）、英語では *Storia Urbana 169*（特集: *Water in Edo-Tokyo's urban space*, 2021）、及び *Tokyo and Venice as Cities on Water: Past Memories and Future Perspectives* (Cambridge Scholars Publishing, 2024) としてすでに刊行されている。

その成果を踏まえ、この1月、再びEToSメンバー7名がヴェネツィアを訪問し、同じカ・フォスカリ大学の大通河を望む美しいバラット・ホールで、11-13日の3日間、シンポジウムを行った。コロナの大変な時期を互いに経験した後に、こうして再びヴェネツィアと東京の比較の国際交流を実現できたのは感慨深いことだった。

前回は、ヴェネツィアと江戸東京の水都比較をテーマとしたが、今回は、都市比較の上での論点をさらに絞り、オンライン・ミーティングでの議論を経て「公と私の空間」というテーマを考え、タイトルは“Public and private spaces in Tokyo and Venice: The role of local communities and values”とした。長い歴史の中で、独特の都市をつくり上げたヴェネツィアと東京を比較するのに大変興味深いテーマだった。EToS側が文理融合の学際的なグループであるのに対応し、ヴェネツィア側も、前回と同様、文系のカ・フォスカリ大学に加え、ヴェネツィア建築大学で教鞭をとっていた建築・都市関係の専門家達が参加した。

*

まず初日冒頭の基調講演は、4年前と同じく、日本側は田中優子氏、イタリア側はドナテッラ・カラビ氏が行った。田中氏は、公と私を語るのに基本となる江戸東京の庶民の居住の空間と近隣コミュニティの問題に光を当て、長屋と路地での共同性を持った住まい方、人間関係の意味を論じた。個人主

義がますます強まる今日、コモンズ（共有空間）の重要性が指摘されるなか、江戸の路地を中心に営まれた人々の暮らしは現代人にとって示唆に富む。

都市史研究の第一人者カラビ氏は、ヴェネツィアのリアルト市場をはじめ、ヨーロッパ都市の市場研究でも知られる。近年、住民の減少、オーバーツーリズムを背景にその存続の危機が語られるリアルト市場の再評価と救済への啓蒙活動を市民とともに展開。その活動を踏まえ公的性格を持つ市場とそれを支える住民という公と私との関係について具体的な問題提起を行った。

第一セッションでは、パオラ・ラナー氏が中世、近世のヴェネツィア社会における女性の役割、特にどこでどんな仕事を担ったかを論じた。産業革命以前においてヴェネツィアの造船所（アルセナーレ）やポーロニアの燃糸工場で働いた女性の様子が紹介され、生産施設という公的な性格もある職場での女性の労働という興味深い問題提起がなされた。

小林ふみ子氏は、山東京伝の『四季交加』や日本橋通りの風景を描いた絵巻『熙代勝覧』には老若男女、身分を問わず様々な人々の街路での多彩な活動の様子が活写されていることを論じ、車が登場する前の江戸においては、街路がさまざまな用途に使われる公共空間だったことを示した。「広場」が象徴的な公共空間として語られるイタリアに対し、日本の都市では街路が一種の広場の役割をもったと言える。働く女性についての言及もなされ、ラナー氏の提起した都市の公私の空間を舞台としたジェンダーの視点からの研究に、日伊比較の大きな可能性が感じられた。

二日目の第二セッションでは、パケーレ・スクー氏が、多民族、多宗教が共存したヴェネツィアで、少数派のユダヤ人が物理的に困われたゲットーに集住させられた問題を取り上げ、キリスト教徒と隣り合って暮らした彼らの状況を解説した。複雑に織りなされる都市社会での公と私を論ずるのに新たな視点が提示されたと言える。一般市民も、門衛がいる入口から日没前の時間帯、自由に中に入ることができたという。

続いて、ローザ・カーロ氏は、8代将軍吉宗のもとで、困窮し

た庶民に無料で医療を提供する最初の施設として1722年に設立された小石川養生所の先進的な役割を明らかにした。江戸の都市空間の中に、医療福祉を目的にした公的な施設ができた意義を論じ、公と私の問題に現代とも通じる新たな光を投げかけた。

第三セッションでは、ジョヴァンニ・ファヴェーロ氏が、1516年に設立されたヴェネツィアのゲットー内での人口動態と出産の状況を興味深く論じた。限られた空間にユダヤ人を隔離することで、新婚カップルが独立した家庭を築き難くなり、本家との同居を余儀なくされ、出産を避けようとする圧力となりうる。こうしたユダヤ人の人口増加を妨げる意図がキリスト教支配者の側にあったか否か、また出産・人口増減の実態はどうだったのか。豊富な統計資料をもとにした考察は、まさに公的な政策と私的な生活の実像の間を問い直す。

米家志乃布氏は、近代東京に登場した名所である偉人像を取り上げ、都市空間における彫像の位置と特徴について論じた。山の手地区に集中し、広場、公園、社寺の境内、学校などの公共空間に置かれ新たな景観を生んだものの、銅像はその公共空間と不調和な状態にあることが多く、像の持ち主自身の個人的な功績を称える私的空間としても機能していたとする興味深い考察を示した。

高道昌志氏は、水都東京らしい公共空間として河岸に着目した。本来、公有地だったこれらの空間は、やがて民間の商人によって建てられた倉庫や商店で埋め尽くされた。近代に入っても、個人や企業による小さな民間活動のボトムアップ的な組み合わせによって東京の公的な水辺空間が維持され、河岸の制度的な再編成がそれを支えたという指摘が注目される。まさに河岸は水都における公と私を接続する要の場である。

第四セッションでは、ステーファノ・ソリアーニ氏が、ヴェネツィアの本土側のマルゲーラ地区の港と工業地帯を取り上げた。港湾と工業の大発展でヴェネツィアのテリトリーオの近代化の原動力となった一方、埋立てによる発展がラグーナの水環境のバランスを壊し、脱工業化の段階では施設が放棄されるなど、問題も抱える。こうした歴史の中での公共と民間

の複合的な行動の結果を物語る景観と都市のランドマークの進化と再定義に挑戦する刺激的な発表だった。

高村雅彦氏は、戦後の東京で、「都市の美」を理由に公共空間から抹殺された特異なコミュニティとしての水上住居と不法占拠屋台に光を当てた。特に、ヴェネツィアにも存在したことのない公的水面に船上で暮らす人々に関する興味深い発表は、大きな衝撃を与えた。近代東京に登場した、積み替えや荷物の仕分けのために艇の上で暮らす人々の存在は、港湾の空間構造と荷役のあり方の違いと結びつき、比較研究にも重要な示唆を与える。

キアラ・スパダー氏は、ヴェネツィアのラグーナの島々での農業生産の可能性に注目し、そうした食材を生む様々な私的な実践の繋がりが、この水の都の食のランドスケープを形づくり、公的な想像力を高めつつあることを論じた。食を生む公的、私的空間、開かれたコモンズ、それらの連携が、ヴェネツィアにおける人間関係を形成する新しい方法を教えてくれると説く。

第五セッションでは、ジョルジョ・ジャニギアン氏が、水上に形成されたヴェネツィアでは、飲料水を確保するのに雨水を集める貯水槽の方法が発達した歴史を取り上げ、上流階級の邸宅では個人の私的な中庭に設けられたのに対し、一般の市民用には広場、集合的な中庭など公的な空間に設けられ、コミュニティの結束を生んだことを論じた。時代とともにその建設技術が進化した過程も明らかにした。

岡村民夫氏は、アニメ巡礼と日本のアニメにおける東京の表現について論じた。80年代から90年代にかけて、スタジオジブリがアニメ制作にロケハンを導入し、東京西郊の都市化の歴史をリアルに表現したのに対し、2000年代以降、特に細田守と新海誠はCGを駆使することで、東京の様々な場所をよりリアルに描き、若者から大きな支持を得て、アニメ巡礼ブームを過熱させたと語った。

次に、ルーカ・ザン氏は、ヴェネツィア最大の公的施設で産業遺産であるアルセナーレ（海軍基地で造船所）を対象に、その歴史的な意義と現状、近未来への活用ビジョンを示し、この巨大な施設の再生が実現できれば、ヴェネツィア市民にとっ

て社会的・文化的に大きな貢献となると論じた。

最終三日目の第六セッションでは、陣内が商業、娯楽・エンターテインメント、飲食の楽しみなど、人間生活と深く結びつき、都市に文化と活力を生んできた盛り場を日本らしい公的空間として取り上げ、その歴史の変遷を都市の拡大発展と絡めて考察した。その上で、関東大震災後から戦後に、郊外の鉄道駅周辺に形成された商店街や飲み屋街が近年、新たな視点で評価される状況を考察し、杉並区阿佐ヶ谷駅の周辺エリアを対象にそのパブリック、セミパブリックな場所としての価値を論じた。

続いてフィリッポ・ドルネッティ氏は、図らずも阿佐ヶ谷の東隣、高円寺の商店街での興味深いフィールド調査の成果をも



とに、近隣コミュニティにとっての商店街の意義を論じた。また1980年代以後、衰退傾向にある商店街の中で、高円寺北仲商店街が、過去20年間に市民の自発的な行動、特に「素人の乱」という活動家集団の創発的な動きによって、商店街が甦った過程を分析考察し、商店街のような公共空間の活性化がコミュニティの再生につながることを示した。フランコ・マンクーゾ氏は、ヴェネツィアの公共空間には、ラグーナと運河という水の空間があり、陸上にはカンポ（広場）、コルテ（共有の中庭）、カンピエッロ（小広場）という生活の中心となる空間、カッレ、フォンダメンタという歩行で移動する空間があって、二重構造からなると説く。その両者が重なり、連携して様々な活動の場となり、人々の交流を生む多彩な公共空間を生み出した仕組みを解明した。最終パネルでは、イタリア側3名と日本側1名（陣内）との間で総合討論がなされた。日本の文化、暮らし、歴史の継承を支えるインタンジブルな要素の重要性がまずは強調された。ヴェネツィアに関しては、オーバーツーリズムをどう克服するかという論点が議論の一つとなり、高円寺のような市民の下から

の活動と連動してこそ、公的な空間の活動、意味が継承できるという認識が示された。

*

各セッションごとの日伊比較の掘り下げは難しかったが、全体としては「公と私」をめぐる実に多彩な興味深い論点が出され、共通性と違いの両面を持つ日伊両国、あるいは東京とヴェネツィアの学際的な立場からの比較研究の面白さとその可能性を互いに深く認識することができた。今後もこうした国際交流を継続しようということで意見の一致を見た。この国際シンポジウムの開催に尽力下さったヴェネツィア「カ・フォスカリ」大学のローザ・カーロリ教授とステファノ・ソリアーニ教授に心からお礼を述べたい。なお、このシンポジウムは4年前と同様、東芝国際交流財団のご支援によって実現できた。記して感謝申し上げます。

冬場の観光客の比較的少ないこの時期に、シンポジウムの合間を縫って、生活感のあるヴェネツィアの街を徘徊・観察し、この水都の伝統文化である飲み歩きを楽しめたのも都市を研究する我々にとって貴重な体験だった。（陣内秀信）



研究会

「下北沢から考える一下北沢の街歩き+クロストーク」

開催日：2024年1月26日（金）

場所：下北沢

2023年12月の研究会「東京と小説を考える 東京小説家・山崎修平氏を囲んで」に続き、2024年1月、再び同じメンバーで（岡村民夫+山道拓人+ゲスト山崎修平）「下北沢から考える一下北沢の街歩き+クロストーク」と題して研究会を行った。

前半パートは、近年開発が進む小田急線跡地の活用エリア「下北線路街」の街歩きをおこなった。「下北線路街」は、小田急電鉄が主導するまちづくりプロジェクトである。東北沢駅-下北沢駅-世田谷代田駅の3駅間の地上部分全長約1.7kmに及ぶ範囲を全部で10ブロックほどに分け、支援型開発をコンセプトに地域貢献施設が線状に展開する。本研究会メンバーである山道（建築学）は、設計事務所ツバメアーキテクトとして下北沢駅南西側の広場「のはら」、その場所のメンテナンスをする地元の植栽サークル拠点「こや」、向かい側のアートギャラリー・祭りの道具置き場である「SRR project space」、また中核施設である「ボーナストラック」と「HORA BUILDING」の全部で5つのプロジェクトに関わっている。それらに立ち寄りながら、通常のトップダウン的な開発と異なる、市民のリアクションがフィードバックされたプロセスを経たことが説明された。

途中で、岡村（表象文化論）から、以前小田急線下北沢2号踏切があった、急カーブする道路のエッジに過去の踏切の事故者に対する地蔵尊があることや、かつて沢沿いの通り道であったことが説明された。現在の開発でいえば、「のはら」「こや」「SPP GALLERY」「雨庭広場」が集まり接する箇所でもある。さまざまな新旧のもの同士がクロスする、裂け目のような場所であることが再認識された。その箇所において、現在では、地域の古い樹木を再生する「古樹」という市民活動が行われていることも偶然だが象徴的であった。また、世田谷代田駅前のレベルを下るロータリー部分にある、ダイダラボッチの「足跡」の経緯と地形との関係を確認しながら、街歩きを折り返した。異なる専門家による街歩きは解説が時空間的に立体感のあるものとなった。

後半パートは、「ボーナストラック」脇の「HORA BUILDING」の1Fのギャラリースペースにてレクチャーをお

こなった。まずは、山道から開発の振り返りをおこなった。イヴァン・イリイチの第二の分水嶺（ある専門性によって世の中が便利になった後に、専門分野が産業化し、今度は人間側が産業によって使われる逆転現象）を引用しながら、私鉄開発の歴史を俯瞰しつつ、近年日本全国で見られる駅前ビル開発が第二の分水嶺の状況であり地域性を破壊していることを解説した。同時に、そうならないためのオルタナティブとして下北沢の事例を位置付けた。

続けて岡村は「下北沢の「沢」を求めて 柳田国男、萩原朔太郎、吉増剛造」と題したレクチャーをおこなった。萩原朔太郎の幻想小説「猫町」（1935年）の迷路の原型に下北沢の複雑な町並みがあったこと、2号踏切跡が、古道の分岐点に小田急線が加わった特異な「裂け目」であり「衢」でもあったこと、しかも柳田国男が1920年に調査した、ダイダラボッチの足跡と伝わる泉から流れ出た小川がいまも暗渠として「踏切地蔵」傍を流れたり、森巖寺川暗渠や北沢川暗渠に合流しながら信仰の史跡どうしを結んでいること、1970年前後に詩人・吉増剛造が下北沢を「流民」がくだる不穏な窪地として表現していたことなどを紹介し、下北線路街が下北沢のひそかな脈絡とどのような関係を結んでいくのかに関心があると述べた。

その後、地域のマップに表現される歴史や現存する都市的な構築物から読み取れる下北沢の風景をめぐってクロストークがなされた。下北沢という一つの場所に対し、さまざまな切り口で言葉を交わす複眼的な議論ができたのはこの座組みらしい成果と言えよう。見方によって下北沢の範囲が推移していくことも興味深い。最後に、山崎修平氏や、イベント参加者数名から即興的なポエトリーリーディングが披露された。山崎氏の詩は「下北沢のことば」という一節から始まる。下北沢のまち、人、状況が語りかけてくるようなシーンが朗読された。時層が重なり、賑やかで、多弁で路上や裂け目に「言葉が溢れる」下北沢の空気感が鮮やかに表現され、会を締めくくった。街歩き、レクチャー、ポエトリーリーディングという、文理複眼をうたうEToSらしい会となった。

シンポジウム

「東京湾シンポジウム」

開催日：2024年2月15日（木）

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 新一口坂校舎 301 教室（オンライン併用）

江戸東京の大きな特性として、東京湾の存在があります。世界において、江戸東京と同様に大河川の存在が核になっている大都市は、ロンドンやパリ、ソウルなど数かず思い浮かぶものの、なかでも同時に大きく海に面しているところとしてニューヨークやボストンはありますが、湾という江戸東京の地形はなかでも特徴的といえます。

ところがこの都市の研究においては、陸上部分にばかり光が当てられてきました。そこでシンポジウムで、その東京湾を中心に据えて考えてみようということで立てたのがこの企画です。この都市に住む人びとが眼前の海辺をどのように見、どのように利用し、つき合ってきたか、都市史、美術史、地図史と文理の垣根を越えてさまざまな分野の専門家による最先端の研究成果を交差させてみようというのがねらいです。

まず当センター特任教授の陣内秀信氏が「東京臨海部の空間史—形態・機能・意味の視点から」と題する基調講演を行いました。世界の他の都市と較べても特徴的な、遠浅で絶好の漁場でもある海湾の奥にあるという江戸東京の地理的特性を押さえ、前近代から埋立と舟運による物流システムの構築によって水辺を利用し、漁業や祭祀その他さまざまな生活文化を発達させてきたことがまず紹介されました。明治に入って東京築港計画が断念され隅田川口改良事業へ性格を変えた後も、昭和前期にかけて湾の埋立ては続き、運河を挟んで島が連なるように造成された埋立地の間に貨物が解で運ばれる江戸時代の河岸のような物流空間ができたこと、また1960年代に高度経済成長を実現した裏側で、都市の歴史的・環境的価値が失われ、70年代以降、水の都市の再生の試みは行われてきてはいるが、1995年の都市博中止以後、行政側がランドビジョンを描くことなく今日に至っているという問題点が指摘されました。ポスト工業化社会において水辺に優れた都市空間を創出してきた欧米都市に対し、遅れをとっているだけに、むしろこれからに向けてさまざまな展望を描き得る、その可能性の萌芽にも言及されました。

つづいて美術史、とりわけ浮世絵研究の立場から渡邊晃氏

（太田記念美術館）が「浮世絵に描かれた江戸湾と水辺」と題して発表されました。ここ10年来、地形や土木事業に注目した展覧会を手がけられた渡邊氏が、最近出版された『浮世絵でたどる!江戸の凸凹地形散歩』（山川出版社）の成果を生かして、まず分析の俎上に載せられたのは歌川広重晩年の揃い物として名高い「名所江戸百景」です。その全119図中、江戸の台地上に取材する48図のうち崖線沿いが44図、低地71図中水辺を描く図が56図と、はっきりとした傾向が見られ、そこにはおそらく構図上の理由があることを指摘されました。続いて、海岸線に関わる主要エリア ①深川 ②日本橋・築地 ③浅草・向島 ④高輪・品川に分けて、広重はじめさまざまな絵師によるそれぞれを描く多彩な作品を論じながら、とりわけ広重はおおかた地形に忠実に描く傾向がある一方、ときに大胆な加工を行っていることを検証されました。

つぎの浮世絵や絵地図を横断的に研究しているラドゥ・レカ氏（香港浸会大学）による「水面下の想像の接触ゾーン—江戸湾の十九世紀地図をめぐる」は、幕末以降、欧米から外国人がやってくるようになると、近世には遠浅の海としてしかほとんど認識されていなかった湾の水深の計測という課題が外国人と日本人の双方から浮かびあがったことに注目された発表でした。科学的測量というだけでなく海防の問題として意識されたことが日本、欧米双方に残された数多くの地図、測量図からあきらかにされました。幕末明治初期において、江戸湾は、日本国内のさまざまなエージェントと西洋のさまざまなエージェントの接触地帯であったと同時に知識の媒介の場であり、実用的、商業的に必要とされた水深測量データが、政治的な意図と絡みあっていたことなどが指摘されました。

最後に締めくくりとして久保純子氏（早稲田大学）が「東京湾の海岸線の変化」として13万年前から現代まで、地球史的な時系列で湾の地形の成り立ちや海岸線の変化を概観されました。まず基層として陸のプレートの下に海のプレートが落ちこんでゆくところの堆積物が湾の入り口に高さを形成し

たこと、氷期と間氷期の変動による海水面の変化があり、数千年前には「奥東京湾」が内陸深く食い込んでいたものが、河川がもたらす土砂によって沖積平野が形成されたこと、かつて内陸まで海であったことが遺物、遺跡からも確認できるなど自然による地形の形成を提示され、その後近世以後埋め立てによって海岸線が変化していったことを紹介されました。それだけに今日、沿岸部には広くいわゆるゼロメートル地帯が分布し、災害に備えた対策がさまざまに行われているものの、以前、脆弱であるという問題を抱えていることなどが論じられました。

このあと、全体討論として、センター長の米家志乃布氏をコーディネーターとして、登壇者とフロアからの意見交換が行われ、登壇者のコメントを中心にさまざまな議論がなされました。とりわけ、この都市は危険だけれども、これだけ長らく人が住んできたのはそれだけ恵みも多いからということであり、台地と平野部からなる凹凸や湾内に人工島が点在する地形の特色、そこに築かれた名所、舟運といった遺産や伝統を未来に活かしていくことが提言されました。

このように都市史、自然地理学、古地図研究、美術史と多方面にわたる報告者が諸分野の研究史をふまえた新知見もちよって考察する文理複眼の有効性が実感されたこともふまえ、東京湾は今後さらに深めていきたいテーマとして、センターをあげてとり組んでいくことを確認したところです。

報告会

「江戸東京研究センター2023年度報告会」

開催日：2024年2月28日（水）

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー 25 階 B 会議室

2023年度報告会のプログラムは、3本の研究発表と本センターの三つのメイン・プロジェクトからの報告で構成されています。

まず、高村研究室所属の照沼和佳奈氏から、修士論文の成果をもとにした「玉川上水通船における河岸空間の場所性—船溜と都市構造に着目して—」と題した詳細な研究発表が行われました。明治初年のわずかな時期に行われた玉川通船によって造られた船溜を具体的な図面で提示し、その空

間と場所性を論じたものです。

次に、一昨年より特別プロジェクトとして活動している高村研究室が中心となってイタリア側の研究者と行っている「国際共同研究-Edo Castle Misson」の成果の一部として、渡邊勢士氏・霍達氏による「寛永江戸城のCAD復元研究」が披露されました。明暦の大火以後は再建されなかった江戸城天守、幕末に失われた三の丸御殿など、これまで江戸城のモデルは、江戸東京博物館をはじめ、様々なかたちで復元・展示されてきました。本研究では、それらの先行事例を丁寧に検証しつつ、図面資料を丹念にCAD図面で復元しました。これをもとに、イタリア側の担当者によって3D化されることが今後の展開となるそうです。

そして、江戸東京研究センター客員研究員の皆川典久氏より「東京発掘プロジェクト～千代田レジェンド・リノベーション」と題した報告がありました。これは、千代田区が行っている「千代田学」研究助成を受けた2023年度のプロジェクト成果でもあります。主に建築学科の学生が中心となった授業において、千代田区にある様々な外濠の遺構をもとに、まち全体を「博物館」にしよう!という試みでした。

休憩をはさみ、メイン・プロジェクトの報告です。第1プロジェクト「地理情報システムと名所の景観」（福井恒明教授・米家志乃布教授）では、今年度の作業として、中国の名所図会との比較研究、関東大震災写真帖に映し出された東京名所の地域差について報告がありました。第2プロジェクト「江戸東京の文学と都市史」（小林ふみ子教授・高村雅彦教授）では、今年度に出版された2冊の書籍の紹介と2024年2月に国際日本学研究所と共催で実施した「東京湾シンポジウム」の報告がありました。第3プロジェクト「都市の表象文化と近未来東京のデザイン」（岡村民夫教授・山道拓人准教授）では、詩人・小説家の山崎修平さんを招いた研究会、下北沢の街歩き企画などの内容について報告がありました（詳細は、『EToS年度報告書Vol.7（2024）』を参照）。各プロジェクトの成果や個別の研究発表だけでなく、プロジェクト相互の関係や次年度のセンターの研究活動についても意見交換が行われ、大変有意義な会となりました。

講義

「フィールドワーク」

江戸東京研究センターにあって、学生を中心とする学内のブランディング事業、つまりインナーブランディングはもっとも重要な活動となる。デザイン工学部建築学科では、学部3年生に演習講義名「フィールドワーク(建築)」を設けている。学生たちが主体的に東京の街に出て、面白そうなもの、価値のありそうなものを見つけ出し、実際のフィールドを通して都市や建築の歴史を考えていくのである。具体的には、地図や様々な史料を使いながら歴史的なまちの分析、あるいは住宅などの建物の実測調査と作図、模型製作を行う。こうした作業を通じて、たんに分析方法や実測の知識を身につけるだけでなく、都市や建築の歴史的価値を見出し、その保存や再生がいかに創造的な行為であるかを理解することが目的となる。

(高村雅彦)

講義

「都市解説方法特論—東京発掘プロジェクト 水辺編」

デザイン工学研究科建築学専攻の院生を中心に、東京の水辺を対象として、その土地や建築、人々の営みの歴史を解説し、その価値を発掘して、そこからさらに水とまちの関係を見直すことで、「場」のデザイン提示までを目指したプロジェクトである。基礎的研究・地歴調査からスタートし、フィールドサーベイなどを通じての課題抽出を行った上で、具体的な提言(作品)を成果物として求めている。OBの他にも一般市民を招いた成果発表会を毎年開催し、成果物はカラーの報告書として毎年発行している。2023年度の本事業では、「千代田学」の助成を受け、研究対象エリアを千代田区に特化し、埋没している歴史遺構(レジェンド)を題材に、その価値の再評価と、再生(リノベーション)を模索して、現代都市空間での位置づけを表現する成果物を課した。フィールドサーベイも3回ほど開催し、情報収集のみならずコミュニケーションの場としても極めて有意義だった。発表会での最終成果物としては、立体模型やCGを活用した効果的で意欲あふれる作品もみられ、活発な意見交換が行われた。テーマの発想やプロジェクトの推進は、当センターの客員研究員で、東京スリパチ学会会長の皆川典久氏が担っている。

(皆川典久)

講義

「人文地理学セミナーA/B」

江戸東京研究センターでは、教員による研究活動だけでなく、学生を中心とする学内のブランディング事業、つまりインナーブランディングも重要な教育研究活動のひとつとなります。米家担当のILAC総合科目では、学部2年生以上の履修科目として、「人文地理学セミナーA/B」を開講しています。この授業では、「東京の街歩きコースを提案しよう!」と題し、受講生のグループが、街の案内者になったつもりで、東京の「街歩き」コースを他の受講生や教員に提案します。それを踏まえて、江戸東京という地域の見方、考え方についてみんなで議論します。東京には、多様な自然・歴史・文化をもつ様々な街がたくさんあります。受講生は、実際に「街歩き」コースを提案するために、事前に情報収集し、コースをつくり、パワーポイントで発表します。これらの作業過程で、東京の街に対する多くの発見や気づきがあるでしょう。大学での地理学を学ぶ楽しさを体験し、教養としての地理学はもちろん、今後の専門学習にも活かしていくことを目標としています。

(米家志乃布)

外濠市民塾協力イベント

「天馬船プロジェクト2023/日本橋川」

開催日：2023年10月29日(日)

場所：常盤橋～日本橋

主催：一般社団法人 非営利芸術活動団体コマンドN

共催：「天馬船プロジェクト2023/日本橋川」実行委員会、一般社団法人東京ビエンナーレ

協力：外濠市民塾、東京スリパチ学会、名橋「日本橋」保存会ほか

本プロジェクトは、「東京ビエンナーレ2023」(総合ディレクター：中村政人、西原珉)の公式プログラムとして開催されたアートイベントで、前回(天馬船プロジェクト2021/神田川)に引き続き、外濠市民塾が開催協力をを行いました。

イベントの内容は、日本橋川に架かる常盤橋と日本橋のあいだの区間に、10,000艘のミニチュア木造船(ミニ天馬船)を浮かべ、東京から世界へ向けて水辺の価値発信をするというものです。イベント参加者からはミニ天馬船1艘につき1,000円の寄付をいただき、それを水辺の環境改善や活性化に役立てていくことが最終的な目標となっています。

外濠市民塾は前回からこのイベントに協力しており、企画を担う実行委員や運営スタッフとして貢献を果たしました。また、外濠市民塾がこれまで掲げてきた「水都東京」に対する考え方が、プロジェクトの理念や骨格として反映されています。

イベント当日は、多くのボランティアの方にサポートしていただきながら、大きな事故もなく無事に終了することができました。大潮の日に当たっていたため、川は想定よりも流速が速く、常盤橋から日本橋の約450メートルをミニ天馬船はわずか17分程度で流れていきました。多くの観光船が往来する日本橋川での開催であるため、タイトなスケジュール管理が心配されていましたが、余裕を持ってイベントを終了することができ、改めて自然の持つ水のサイクルの力を認識する機会ともなりました。

加えて今回のイベントは、東京都の屋形船協同組合をはじめ、各行政機関など様々な河川関係者の方々の協力の下で実現することができました。ドネーションや実績や広報などでまだまだ課題はあるものの、プロジェクトを介して、「水辺のネットワーク」が築かれつつあることは大きな成果であったと言えます。

(高道昌志)



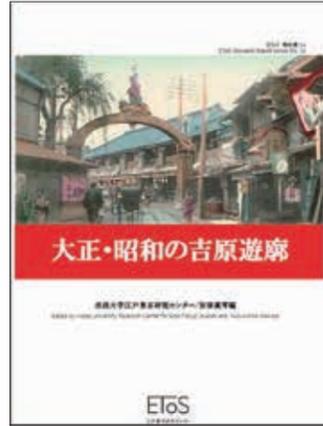
EToS報告書

江戸東京の妖怪アート—文化遺産としての位置づけと活用のあり方—



監修:岡村民夫、横山泰子
 発行:法政大学出版局
 発行年月:2023年3月
 シンポジウムプログラム……………1
 講演
 江戸・東京の妖怪情報—作品と記録の混在と融合— ……湯本 豪 7
 杉浦日向子 江戸／東京の怪 …… 岡村民夫 15
 まちを楽しむ方法としての妖怪アート……………市川 寛也 27
 パネリスト・コメント
 コメント1 気軽に身近な妖怪アート……………横山 泰子 41
 コメント2 江戸東京と妖怪……………神谷 博 43
 コメント3「あいだ」の妖怪……………山道 拓人 47
 執筆者一覧

大正・昭和の吉原遊郭



監修:江戸東京研究センター、安原真琴
 発行:法政大学出版局
 発行年月:2023年3月
 【講演】
 吉原遊廓の「中の人」の手記—成八幡の支店さん・中野幸吉 …… 安原 真琴
 【対談】
 「生き証人にきく—吉原の昭和史」(聞き手:安原真琴) …… 吉原 達雄
 「私が暮らした吉原」(聞き手:安原真琴) …… 不破 利郎
 【コメント】 …… 田中 優子
 【総合討論】
 出席者:吉原 達雄、不破 利郎、田中 優子、小林 ふみ子
 司会:安原 真琴

東京発掘プロジェクト 水辺編V



監修:皆川典久
 発行:江戸東京研究センター
 発行年月:2023年3月
 「東京発掘プロジェクト」とは?(皆川典久)
 01. 舟運美術館
 02. 目黒川舟入場をまちの発着点に
 03. 河岸の更新 — 時代を刻む日本橋川—
 04. 都市の流速
 05. かざぐるまの道
 06. 東京の水辺に賑わいを — 御茶ノ水・水道橋—
 07. 亀島川の湊再編 —「抜け」がつながく水辺空間—

ブックレット「MACHIYA Practical Handbook シン町家実践ハンドブック・2」



編集者:山道拓人
 発行:江戸東京研究センター
 発行年月:2023年3月
 Introduction シン町家(山道拓人)
 Chapter 1 町の営繕とタイポロジーのメンテナンス(アリソン理恵)
 Chapter 2 江戸の亡霊とともに暮らす(山中郁也)
 Chapter 3 シン町家富士見台トンネル(能作淳平)
 Chapter 4 町家は暮らしの選択肢を増やし、街を豊かにする。(寶神尚史)
 Chapter 5 これからの町家型の実践 —鼎談—

EToS刊行物

『東アジアの都市とジェンダー』



著者：小林ふみ子・染谷智幸編
 出版社：文学通信
 発行年月：2023年4月

まえがき——東アジア近世・近代都市はいかに経験されたか(小林ふみ子)

第1部 都市生活を較べる

01 十八世紀の漢陽と江戸における芸能——「芸能の場」という視点からの考察—— 土田牧子

一、はじめに
 二、十八世紀、漢陽における芸能
 三、『奉仕図』第七幅に描かれた曳山台
 四、『落成宴図』に描かれた民衆芸能
 五、十八世紀、江戸の芸能
 六、劇書・錦絵に描かれた芝居小屋の内外
 七、『山王祭之図』に描かれた祭屋台
 八、おわりに——漢陽と江戸の「芸能の場」

02 十八～十九世紀の漢陽の市場、その中を覗いてみる 金 美眞

一、はじめに
 二、漢陽の市場
 三、描かれた漢陽の市場——「城市全図応令」と「太平城市全図」
 四、おわりに

03 近代における市場空間の表と裏——神田多町市場を例として—— 金谷匡高

一、はじめに
 二、東京の中の市場
 三、神田市場の立地
 四、神田市場内に集まる人々
 五、神田青物市場の空間について
 六、街路と地価
 七、おわりに

04 園芸文化で比較する漢陽と江戸 市川寛明

一、園芸文化にみる正統文化からの逸脱
 二、「花を育て、木を植える」を読む
 三、おわりに——園芸文化の江戸と漢陽

05 江戸・漢陽にみる花見と遊山 鄭 敬珍

一、漢陽における花見・遊山の中心地と漢陽都城
 二、漢陽の花見と遊山

三、江戸における花見——桃の花、蓮の花、柳
 四、江戸における花見——桜
 五、文人たちの花見——小金井
 六、まとめ

06 東アジア都市の行楽地とその場所性 高村雅彦

一、日中韓に見る花見の名所とその立地
 二、名所の場所性と意味
 三、「姑蘇繁華図」に描かれた遊山の風景
 四、『清嘉録』に読む年中行事の行楽地
 五、現代蘇州の名所空間
 六、場所性を受け継ぐ名所空間

第2部 女性の描く都市・都市のなかの女性

07 『おもろさうし』の聞得大君——聞得大君と首里城、地方—— 福 寛美

一、はじめに
 二、巻一——一のおモロ
 三、首里城内の聖域
 四、聞得大君の霊能
 五、聞得大君の乗馬のおモロ
 六、聞得大君と「三平等の大アムシラレ」
 七、おわりに

08 朝鮮後期女性漢詩人の特徴とその周辺環境 山田恭子

一、はじめに
 二、朝鮮後期女性漢詩人の概観
 三、その特徴と周辺環境
 四、三湖亭詩社の結成
 五、おわりに

09 明清小説のなかの女性 仙石知子

一、はじめに
 二、不貞許容の条件
 三、族譜に見られる血筋の重視
 四、商人の妻
 五、おわりに

10 韓国古典小説の漢陽と女性の愛欲 高 永燭

一、朝鮮王朝時代の首都漢陽
 二、『雲英伝』の漢陽と女性
 三、『折花奇譚』の漢陽と女性
 四、『布衣交集』の漢陽と女性
 五、漢陽と女性の愛欲

11 女性戯作者の描く都市江戸——「婦人亀遊」の黄表紙から—— 小林ふみ子

一、はじめに——近世日本の女性のことばと都市
 二、作者「婦人亀遊」とその男性疑惑の問題
 三、『嗚呼不儘 世之助嘶』の女性視点
 四、都市の危険性と可能性
 五、おわりに

12 訴えに行く女性たち——清末唱本の一側面—— 岩田和子

一、はじめに
 二、『滴血珠』説唱故事の形成
 三、『滴血珠』故事の流布
 四、清末四川唱本に見える「訴えに行く女性たち」
 五、おわりに

13 百貨店文化と女性作家——与謝野晶子、森しげの『三越』掲載作品を中心に—— 藤木直実

一、百貨店文化の展開と文学

二、女性作家の描いた三越
 三、ノラたちの冒険

14 清末民国初期台湾女性の都市——『楊水心日記』にみる—— 吳 翠華

一、はじめに
 二、楊水心にとっての都市——霧峰林家
 三、もう一つの都市——東京
 四、おわりに

第3部 日中韓の女性たち

15 都市に生きた多様な女性たち 田中優子

一、表現する女性、表現される女性
 二、表現される女性たち
 三、江戸の女性たち
 四、女湯に集う女性たち
 五、表現する女性たち

16 中国明清時代の都市と女性をめぐる覚え書き 大木 康

一、「商人の妻」
 二、郷村の女性と文学
 三、『雨窓歌枕集』の性格
 四、顔を見せない女性、見せてよい女性
 五、「小説」を書く女性
 六、裁判と文学

17 廳上の野談、廳下の淫談——朝鮮時代の女性たちの深奥にせまる—— 染谷智幸

一、イザベラ・バードの見た、都市ソウルの女性たち
 二、野談と淫談
 三、『紀伊齋常談』の一話
 四、『紀伊齋常談』のリアリティ
 五、『紀伊齋常談』の特色
 六、廳上の野談、廳下の淫談
 七、野談と淫談に通じるもの

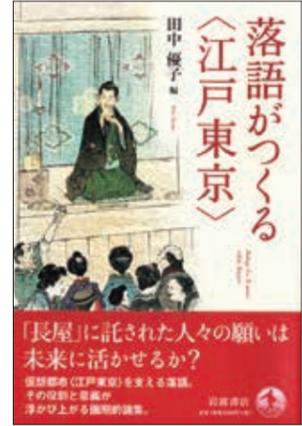
付録
 『朝鮮の雑誌—18～19世紀ソウル両班の趣向』翻訳
 翻訳：染谷智幸・金美眞・鄭敬珍

『朝鮮の雑誌—18～19世紀ソウル両班の趣向』について
 〈翻訳の意図〉
 〈本の紹介〉
 〈著者紹介〉

目次
 序
 8 「花を育て、木を植える」
 14 「市場にはあらゆる食べ物と詐欺師、そして語り手」
 15 「花見(花遊び)はここで」
 16 「演奏と踊り、そして芝居」

関連年表
 (歴史的画期、中国、朝鮮、日本、琉球、台湾)
 東アジアの女性文芸を知るためのブックガイド
 (中国・韓国・日本)
 あとがき(小林ふみ子・染谷智幸)
 執筆一覧

『落語がつくる〈江戸東京〉』



著者：田中 優子 編
 出版社：岩波書店
 発行年月：2023年9月

【目次】

はじめに……………田中優子

I 都市の物語としての落語

1 江戸東京の物語としての落語……………小林ふみ子
 2 落語——文化人類学の視点から……………山本真鳥

II 落語がつくる地理感覚

3 動く江戸東京落語——「黄金餅」から出発して……………川添 裕
 4 「文七元結」と江戸・東京……………佐藤至子
 5 はるかなる「落語国」をさがして——落語のフィールドワーク……………田中 敦

III 長屋をめぐりフィクションとリアリティ

6 「長屋」という思想……………田中優子
 7 「怪談牡丹燈籠」の長屋……………横山泰子
 8 「お節徳三郎」論——熊さん八つあんなたちのフェミニズム……………中丸宣明

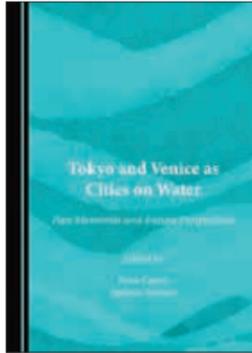
IV 長屋の比較文化論

9 都市空間のなかの長屋——江戸東京とヴェネツィア……陣内秀信
 10 上海の長屋と滑稽戯……………高村雅彦
 11 現代の長屋ぐらし事情……………栗生はるか

所員著書

『Tokyo and Venice as Cities on Water: Past Memories and Future Perspectives』

著者:Rosa Caroli, Stefano Soriani 編
出版社:Cambridge Scholars Publishing
発行年月:2023年12月22日



【目次】

List of Figures x
Foreword xxviii
Rosa Caroli and Stefano Soriani
Editors' Notexliv
Introduction: Water and the City
Chapter 1 2
Waterside Culture in Edo
Yuko Tanaka
Chapter 2 52
Venice and the Sea: A Cosmopolitan Commercial City
Donatella Calabi
Part 1: Memory of Place, Memory of Water
Chapter 3 78
Representations of Edo-Tokyo in Illustrations
Fumiko Kobayashi
Chapter 4 113
Memory and Representation of Edo through Parody. Edo sunago and Muda sunago
Paola Maschio
Chapter 5 127
Memories of Water: Traces of Lost Watery Spaces around Kanda River
Rosa Caroli
viii Table of Contents
Chapter 6 161
Urban and Environmental Territories Emerging from Sacred Water Sites in Edo-Tokyo
Masahiko Takamura
Chapter 7 186
Visual Memories and Water Surfaces: The Photographer's Eye in Venice
Angelo Maggi
Chapter 8 198
Edo-Tokyo Gardens Passed Down to Today: A Uniqueness Derived from Diverse Waterways and Terrain
Nozomi Hatakeyama
Chapter 9 211
Mapping Tokyo: Cartography and the Representation of the Capital of Japan from the Nineteenth to Twentieth Centuries
Shinobu Komeie
Part 2: The Future of Past Heritage

Chapter 10 236
The Venice Tools for its Conservation are Ineffective: Why?
Giorgio Gianighian
Chapter 11 258
Preservation and Continuation of "Local Ecosystems": The Case of Tokyo's Public Baths
Haruka Kuryu
Chapter 12 279
Conservation Issues between Venice and Tokyo
Matteo Dario Paolucci
Chapter 13 306
Venice, When the Territory is Water
Franco Mancuso
Tokyo and Venice as Cities on Water: Past Memories and Future Perspectives
ix
Chapter 14 340
Wine on Water/Oil on Water. Traditions and the Liquid Modernity of Viticulture and Olive Growing in the Lagoon of Venice
Federica Letizia Cavallo and Davide Mastrovito
Part 3: Inhabitants of 'Global' Cities: Economy, Culture and Governance
Chapter 15 364
Reflecting the Changing Landscapes of Edo-Tokyo's East Bank Waterways
Paul Waley
Chapter 16 391
Water and the Waterfront(s), or the Missing Dimension in the Debate on "Metropolitan Venice"
Stefano Soriani and Alessandro Calzavara
Chapter 17 414
Danchi and Tower Mansions. The Origin and Current Situation of Collective Housing in Tokyo: From Centre to Periphery, from Inland to Waterfront
Makoto Shin Watanabe and Yoko Kinoshita
Chapter 18 437
The Revival of Tokyo as a City of Water and a Future Vision for the City
Hidenobu Jinnai
Contributors 463

研究者著書

書名:『新・江戸東京研究の世界』
著者名:米家志乃布・田中優子・根崎光男・横山泰子・陣内秀信・小林ふみ子・川添裕・中丸宣明・高村雅彦・金谷匡高・稲葉佳子・岡村民夫・増淵敏之・森田喬・山本真鳥・山道拓人・北山恒・栗生はるか・小島聡・石神隆 その他
発行:法政大学出版局
発行年月:2023年1月

書名:『地理学辞典』日本地理学会
著者名:米家志乃布(分担執筆)
標題:ロシア圏研究
発行:丸善出版
発行年月:2023年2月

書名:『村野日誌 2 明治43-44年(武相近代資料集1-2)』
著者名:齋藤智志(村野日誌研究会会員として史料翻刻) 村野日誌研究会・町田市自由民権資料館編
発行:町田市教育委員会
発行年月:2023年3月

書名:『オセアニアの今-伝統文化とグローバル化』
著者名:山本真鳥
発行:明石書店
発行年月:2023年7月31日

書名:『女だろ!江戸から見ると』
著者名:田中優子
発行:青土社
発行年月:2023年11月

論文・学会発表・作品

査読付論文

論文標題:地形から読み解く都市の構造と歴史
著者名:皆川典久
雑誌名:地形第43巻第4号(日本地形学連合発行)
発行年月:2023年1月31日

論文標題:Impact of Soviet worker residential area design on Beijing No. 2 textile factory: Research of worker residential planning during the First Five-Year Plan
著者名:Shuai Shao, Masahiko Takamura
雑誌名:Japan Architectural Review
発行年月:2023年6月

論文標題:2022年学会展望 地図
著者名:米家志乃布
雑誌名:『人文地理』75-3
発行年月:2023年10月

論文

論文標題:ベルクソンをめぐってー『道徳と宗教の二つの源泉』第四章の読解ー
著者名:安孫子信
雑誌名:『法政哲学』第18号
発行年月:2022年12月29日

論文標題:「文検」と国文学研究ー擬似教室空間のなかの文学
著者名:衣笠正晃
雑誌名:『言語と文化』第20号(法政大学言語・文化センター)
発行年月:2023年1月

論文標題:研究者たちの指針としての日本学術会議
著者名:田中優子
雑誌名:学術の動向
発行年月:2023年2月

論文標題:「地球環境適応策としての下水道のあり方」～グリーンインフラとしての下水道への提言～
著者名:神谷博
雑誌名:下水道協会誌
発行年月:2023年2月号

論文標題:インターナショナルからトランスナショナルへー国際日本学の新しい展開
著者名:安孫子信
雑誌名:『国際日本学』第20号
発行年月:2023年2月10日

論文標題:近代東京の名所体験ー名所図会・案内本の分析を中心としてー
著者名:米家志乃布

雑誌名:法政大学文学部紀要86
発行年月:2023年3月

論文標題:学術と社会
著者名:田中優子
雑誌名:学術の動向
発行年月:2023年3月

論文標題:自転車専用通行帯の整備実態における道路空間再構築に関する研究—東京都及び神奈川県を対象に—
著者名:入倉理人、高見公雄
雑誌名:法政大学大学院概要集
発行年月:2023年3月

論文標題:市街地整備推進による自然・地形改変の経緯に関する研究—水
の郷日野を中心に—
著者名:志村綾音、高見公雄
雑誌名:法政大学大学院概要集
発行年月:2023年3月

論文標題:産業観光が発展する要因に関する研究—新潟県の産業観光に着
目して—
著者名:宋陽、高見公雄
雑誌名:法政大学大学院概要集
発行年月:2023年3月

論文標題:東京湾横断道路開通後における
君津地域の人口動態に関する研究
著者名:福山主磨、高見公雄
雑誌名:法政大学大学院概要集
発行年月:2023年3月

論文標題:オセアニア植民地時代における非白人移住者(2) —サモアのプ
ランテーション開発と年季契約労働・序説—
著者名:山本真鳥
雑誌名:経済志林90巻3/4号95-122ページ
発行年月:2023年3月

論文標題:トランスナショナルな日本研究に向けて
著者名:高田圭
雑誌名:国際日本文学
発行年月:2023年3月

論文標題:特集「日本研究とトランスナショナリズム」に寄せて
著者名:高田圭
雑誌名:国際日本文学
発行年月:2023年3月

論文標題:「著作」の範囲—大田南畝の知の広がり
著者名:小林ふみ子
雑誌名:没後200年 江戸の知の巨星大田南畝の世界(たばこと塩の博物
館展覧会図録)
発行年月:2023年4月

論文標題:江戸の虫めづる文化

著者名:田中優子
雑誌名:虫めづる日本の人々
発行年月:2023年7月

論文標題:江戸名所絵本における風景表現の研究
著者名:小林ふみ子
雑誌名:鹿島美術研究年報別冊第39号
発行年月:2023年7月

論文標題:「イタリアの都市と食」
著者名:陣内秀信
雑誌名:『すまいろん』第113号、2023年夏、pp.41-45.
発行年月:2023年8月25日

論文標題:新しい戦前と「軍拡を許さない女たちの会」
著者名:田中優子
雑誌名:人間と教育
発行年月:2023年9月

論文標題:作者の虚構性と実体性:大田南畝周辺から
著者名:小林ふみ子
雑誌名:國文論叢別冊(神戸大学)
発行年月:2023年9月

論文標題:江戸における「公衆トイレ」の成立・展開とその利用
著者名:根崎光男
雑誌名:『人間環境論集』(法政大学人間環境学会)第24巻第1号
発行年月:2023年10月

論文標題:文学は「昭和」の虚無をどう書いたか
著者名:田中優子
雑誌名:ケヤキブンガク
発行年月:2023年11月

論文標題:隠岐の島西郷港周辺地区の河川利用の変遷と水辺景観形成
著者名:渡邊真由、福島秀哉、福井恒明
雑誌名:第68回土木計画学研究・講演集
発行年月:2023年11月

論文標題:重要文化的景観の価値保全と治水計画の両立—山形県大江町
百目木地区を対象に—
著者名:神山謙悟、鴨潤矢、岡田一天、福井恒明
雑誌名:第68回土木計画学研究・講演集
発行年月:2023年11月

論文標題:「イタリアの都市空間とその描き方」
著者名:陣内秀信
雑誌名:『第50回美術講演会講演録』鹿島美術財団 pp.51-81.
発行年月:2023年11月10日

論文標題:沼津市中心市街地の都市形成過程と景観価値の関係に関する研
究
著者名:山田莉緒、福島秀哉、福井恒明
雑誌名:景観・デザイン研究講演集 19
発行年月:2023年12月

論文標題:重要文化的景観選定範囲内の公共事業設計協議の体制と運用
に関する事例分析
著者名:川上健太、佐瀬優子、福井恒明
雑誌名:景観・デザイン研究講演集 19
発行年月:2023年12月

論文標題:働くこと、開かれていること
著者名:田中優子
雑誌名:学鏡
発行年月:2023年冬号

学会発表(招待講演・国際学会)

発表標題:銭湯から発展する、地域の文化・観光・福祉のつながり
発表者名:栗生はるか他
学会等名:PPP/PFI 大学校
発表場所:WEB
発表年月:2023年1月

発表標題:つく建築
発表者名:栗生はるか他
学会等名:愛知建築士会名古屋北支部
発表年月:2023年1月

発表標題:祭りが生まれる時 一銭湯山車巡行の試み
発表者名:栗生はるか他
学会等名:江戸東京研究センター
発表場所:法政大学
発表年月:2023年1月

発表標題:Compiling the History of Ukiyo-e: the Expansion of
Antiquarianism to Popular Culture in Late Eighteenth-Century
Japan
発表者名:Fumiko Kobayashi
学会等名:Annual Conference, Association for Asian Studies
発表場所:Boston, USA
発表年月:2023年3月

発表標題:La portee philosophique des deux lois sociologiques de
Comte
発表者名:安孫子信
学会等名:国際ワークショップ〈オーギュスト・コント『実証哲学講義』の真の
哲学的射程〉
発表場所:法政大学
発表年月:2023年3月11日

発表標題:好古趣味の流行と大田南畝の『浮世絵類考』起筆
発表者名:小林ふみ子
学会等名:国際浮世絵学会
発表場所:日比谷図書文化会館
発表年月:2023年6月

発表標題:Memory Infighting and Memory Solidarity: Politics of
Remembering in the Post-1968 Movement in Japan

発表者名:Kei Takata
学会等名:Mobilization Conference “Protest, Resistance, and
Democratic Withdrawal: Social Change in Turbulent Times”
発表場所:San Diego State University
発表年月:2023年6月9日

発表標題:イタリア大使館に受け継がれた江戸の大名庭園—調査プロジェク
ト報告会—
発表者名:内藤啓太、陣内秀信、神谷博、畠山望美他
学会等名:イタリア大使館・法政大学江戸東京研究センター・イタリア文化会
館共催シンポジウム
発表場所:イタリア文化会館
発表年月:2023年7月

発表標題:Issues of Subjectivity and Objectivity in Ubiquitous
Mapping
発表者名:Takashi Morita
学会等名:The 31st International Cartographic Conference
発表場所:Cape town, South Africa
発表年月:2023年8月18日

発表標題:Expectations for Visualization of Local History and
Culture in Disaster Reconstruction
発表者名:Tsuneaki Fukui
学会等名:International Conference “Education in Digital Era”,
PAVIA DIGI WEEK 2nd Edition
発表場所:University of Pavia
発表年月:2023年9月

発表標題:身近な地域の魅力を掘り起こす
発表者名:栗生はるか
学会等名:東京都印刷工業組合文京支部
発表場所:株式会社大塚商会本社
発表年月:2023年9月

発表標題:江戸文芸のなかの〈地方〉
発表者名:小林ふみ子
学会等名:韓国日本語文学会
発表場所:群山大学
発表年月:2023年10月

発表標題:江戸大名の庭と上水
発表者名:内藤啓太
学会等名:日本庭園学会オンラインセミナー2023秋
発表場所:オンライン
発表年月:2023年10月

発表標題:地域活動から奇跡の保存再生事例まで
発表者名:栗生はるか
学会等名:日本建築家協会(JIA)再生部会
発表場所:JIA建築家会館
発表年月:2023年10月

発表標題:本郷エリアの文化資源について
発表者名:栗生はるか他

学会等名:全国まちづくり大会
発表場所:明治大学
発表年月:2023年10月

発表標題:「関東大震災と東京の復興—建築・景観・思想・コミュニティ」
発表者名:陣内秀信
シンポジウム名:関東大震災100年「大震災と都市空間—過去に学び、近未来を描く—」
学会等名:法政大学地理学会
発表場所:法政大学市ヶ谷キャンパス
発表年月:2023年10月21日

発表標題:Fine mats in the global Samoan World
発表者名:Matori Yamamoto
学会等名:Measina Conference 2023
発表場所:National University of Samoa, Apia, Samoa
発表年月:2023年10月26日

発表標題:Comparison of Italy and Japan on the preservation of historical and cultural landscapes
発表者名:Tsuneaki Fukui
学会等名:Corso di Restauro Architetonico
発表場所:University of Pavia
発表年月:2023年11月

発表標題:大江建築にみる近代と庭園
発表者名:内藤啓太、陣内秀信、小堀哲夫
学会等名:令和5年度三番町共用会議所一般公開トークイベント
発表場所:三番町共用会議所
発表年月:2023年11月

発表標題:What is Transnational Japanese Studies?
発表者名:Kei Takata
学会等名:The 6th EU-Japan Young Scholars Workshop in Alsace “Transnational Change in Contemporary Japan”
発表場所:European Center for Japanese Studies in Alsace
発表年月:2023年11月17日

発表標題:Observations of the streets Kin the centre of the city of Edo at the end of the 18th century
発表者名:Fumiko Kobayashi
学会等名:“Public and private spaces in Tokyo and Venice: The role of local communities and values”
発表場所:Ca’ Foscari University of Venice
発表年月:2024年1月

発表標題:世田谷三軒茶屋の近世から近代
発表者名:金谷匡高
学会等名:近代文化研究所
発表場所:昭和女子大学
発表年月:2024年2月

学会発表

発表標題:オセアニア植民地時代における非白人移住者(3)ーフィジーのインド人年季契約労働者ー
発表者名:山本真鳥
学会等名:日本オセアニア学会
発表場所:同志社女子大学
発表年月:2023年3月15日

発表標題:Ota Nanpo’s Historicizing of the Yoshiwara Pleasure Quarters Panel Name:Antiquarians in Action: Documenting Objects and Customs in Early Nineteenth-Century Japan
発表者名:Fumiko Kobayashi
学会等名:Assosiation for Asian Studies in Asia
発表場所:Kyonpook University Taegue Korea
発表年月:2023年6月

発表標題:年季契約労働者の歴史人類学—植民地時代サモアのプランテーションと労働者—
発表者名:山本真鳥
学会等名:日本文化人類学会
発表場所:県立広島大学広島キャンパス
発表年月:2023年6月3日

発表標題:トランスナショナルな日本研究とは何か?
発表者名:高田圭
学会等名:法政大学国際日本学研究所主催「トランスナショナルな日本」研究会(第1回)
発表場所:法政大学市ヶ谷キャンパス
発表年月:2023年6月24日

発表標題:イタリア大使館敷地の水環境総合調査報告(その2)
発表者名:神谷博
学会等名:日本環境学会
発表場所:静岡文化芸術大学
発表年月:2023年6月25日

発表標題:江戸東京の公共負担と地域
発表者名:松本剣志郎
学会等名:第62回近世史サマーセミナー
発表場所:早稲田大学
発表年月:2023年7月16日

発表標題:ユビキタス・マッピング概念における“動的”要素についての考察
発表者名:森田喬
学会等名:日本地図学会
発表場所:岐阜県図書館
発表年月:2023年8月27日

発表標題:都市の芸能空間 人と物の集りが楽しみを生む
発表者名:横山泰子
学会等名:風俗史学会
発表場所:東京
発表年月:2023年10月9日

発表標題:雨庭普及のための技術的検討～東京都世田谷区の事例をもとに～
発表者名:神谷博
学会等名:雨水資源化システム学会
発表場所:琉球大学
発表年月:2023年11月4日

発表標題:東京都心部における橋詰空間の空間特性と整備・管理方針及び利用者意識
発表者名:福井昂平、荻原知子、福井恒明
学会等名:第19回景観・デザイン研究発表会(ポスター発表)
発表場所:中央大学
発表年月:2023年12月

発表標題:東京圏における市民参加型広場の空間特性と提供者及び利用者意識
発表者名:前澤健心、荻原知子、福井恒明
学会等名:第19回景観・デザイン研究発表会(ポスター発表)
発表場所:中央大学
発表年月:2023年12月

発表標題:地域活動における地域史共有の実態把握モデルの構築
発表者名:新井奏音、佐瀬優子、福井恒明
学会等名:第19回景観・デザイン研究発表会(ポスター発表)
発表場所:中央大学
発表年月:2023年12月

発表標題:七尾・敦賀における港湾と背後地域の連携
発表者名:大旗望、佐瀬優子、福井恒明
学会等名:第19回景観・デザイン研究発表会(ポスター発表)
発表場所:中央大学
発表年月:2023年12月

発表標題:岩手県大船渡市の差し込み型防災集団移転促進事業における地域特性の影響
発表者名:車谷綾花、福島秀哉、福井恒明
学会等名:第19回景観・デザイン研究発表会(ポスター発表)
発表場所:中央大学
発表年月:2023年12月

発表標題:「再発見される東京の島—波浮港の近代化と集落の拡張」
発表者名:高道昌志
学会等名:『シンポジウム 島からみた江戸東京～交流・広がり・領域』:法政大学江戸東京研究センターほか主催
発表場所:法政大学マルチメディアセンター
発表年月:2023年12月23日

著作について書かれた書評

評者名:杉本史子
媒体名:『日本歴史』
書評掲載年月:2023年2月
対象著書(著者):『近世蝦夷地の地域情報』(米家志乃布)

評者名:長谷川香
媒体名:「東京の都市史」、「建築史学」第八十号
書評掲載年月:2023年3月
対象著書(著者):江戸東京研究センター叢書、『水都学』I～Vのすべて(陣内秀信、高村雅彦他)

評者名:温井亨
媒体名:『都市史研究』10、都市史学会、p.132
書評掲載年月:2023年10月20日
対象著書(著者):『トスカーナ・オルチャ渓谷のテリトリーオ—都市と田園の風景を読む—』(植田暁/陣内秀信/M・ダリオ・パオルッチ/樋渡彩、古小鳥倉、2022年)

作品

作品名:建築作品 六角橋の四軒長屋
著者名:ツバメアーキテクト(山道拓人・千葉元生・西川日満里)
賞・媒体名:新建築2023年2月号
発表日:2023年2月1日

作品名:建築作品 虫村第一期工事
著者名:ツバメアーキテクト(山道拓人・千葉元生・西川日満里)
賞・媒体名:新建築2023年8月号
発表日:2023年8月1日

作品名:建築作品 森の端オフィス
著者名:ツバメアーキテクト(山道拓人・千葉元生・西川日満里)
賞・媒体名:商店建築2023年9月号
発表日:2023年9月

その他

標題:「水都東京ものがたり」外濠(取材)
インタビュー:福井恒明
雑誌名:読売新聞都内版
発行年月:2023年1月8日

講演録標題:杉浦日向子 江戸/東京の怪
著者名:岡村民夫
報告書:江戸東京の妖怪アート—文化遺産としての位置づけと活用のあり方—
発行年月:2023年3月

標題:怪談物のつくりかた 役者の芸と仕掛けの世界
監修者名:横山泰子
企画展示名:国立劇場伝統芸能情報館企画展示監修
年月:2023年4月22日～2023年8月20日

標題:「日本の銭湯」世界遺産並みの価値が認められた訳
著者名:栗生はるか(インタビュー)
雑誌名:東洋経済オンライン
発行年月:2023年5月

発表標題:都市史としての酪農～みんなで一緒に街を歩きませんか～
(近代京都の搾乳業史)
発表者名:金谷匡高
学会等名:ミルク一万年の会交流会
発表場所:秋葉原レンタルスペース203
発表年月:2023年5月20日

標題:歴史の中の文身ーポリネシアのタタウ
著者名:山本真鳥
雑誌名:岩波講座世界歴史19太平洋海域世界 pp.201-211
発行年月:2023年5月30日

標題:守るべきは安全、そして地域の暮らし・文化・風景
著者名:福井恒明
雑誌名:LANDSCAPE DESIGN, No. 150
発行年月:2023年6月

標題:水神から読む江戸東京の都市と領域
著者名:高村雅彦
雑誌名:NHK文化センター青山教室
発行年月:2023年6月9日

標題:赤羽凹凸地形散歩
著者名:皆川典久
雑誌名:東京人2023年8月号
発行年月:2023年7月

標題:「玉川上水・分水網関連遺構100選の展示」における外濠関連以降の執筆
著者名:高道昌志
団体名:玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京連絡会
発行年月:2023年7月

標題:銭湯から考えるまちづくり
著者名:栗生はるか
雑誌名:区画再開発通信vol.643
発行年月:2023年7月

標題:人・土地・建物の流動と再縫合
著者名:栗生はるか他(インタビュー)
雑誌名:建築雑誌
発行年月:2023年7月

発表標題:歴史的な建築デザインを学ぶ(西洋の建築様式と秋田の近代建築を中心に)
発表者名:石渡雄士
学会等名:大学コンソーシアムあきた令和5年度前期高大連携授業
発表場所:カレッジプラザ
発表年月:2023年7月1日

発表標題:寺町の景観デザインについて
発表者名:石渡雄士
学会等名:秋田商工会議所寺町観光研究会
発表場所:秋田商工会議所
発表年月:2023年7月11日

標題:イタリア大使館敷地の水環境総合調査～調査結果と今後に向けて～
講演者名:神谷博
講演:イタリア大使館調査報告会
発表年月:2023年7月20日

標題:「せんとくとまち」が取り組む東京・滝野川稲荷湯の再生と地域活性化
著者名:栗生はるか他(インタビュー)
雑誌名:NTT Sustainable Smart City Partner Program
発行年月:2023年8月

標題:野川の歴史とグリーンインフラ
講演者名:神谷博
講演:野川流域連絡会総会講演
発表年月:2023年9月11日

標題:野川の生態と河川整備の現状
講演者名:神谷博
講演:小金井市公民館講座
発表年月:2023年9月15日

標題:巨星墜つ一渡部與四郎先生の思い出
著者名:高見公雄
雑誌名:都市計画364号
発行年月:2023年9月15日

標題:第3回 田中村が何故京都の一大搾乳地域となったのか
著者名:金谷匡高
雑誌名:日本の酪農・歴史さんぽ【京滋(京都・滋賀)地域編】(webコラム)
発行年月:2023年9月15日

標題:第4回「牛乳搾取営業願」から明治期京都の牧場の様子を垣間見る
著者名:金谷匡高
雑誌名:日本の酪農・歴史さんぽ【京滋(京都・滋賀)地域編】(webコラム)
発行年月:2023年9月22日

標題:銭湯の匂いのする温かいまちをどう守っていくのか
著者名:栗生はるか
雑誌名:コンフォルト193号
発行年月:2023年10月

標題:雨と地下水から読み取る水都の源流～東京の水系と水循環～
講演者名:神谷博
講演:エクセレント講座
発表日:2023年10月17日

発表標題:秋田市の都市形成と空間の返還
発表者名:石渡雄士
学会等名:中央図書館明徳館開館40周年記念市民文化講座
発表場所:秋田市立中央図書館
発表年月:2023年10月22日

発表標題:都内最長の用水路をもつ日野市の歴史とその活用
発表者名:石渡雄士
学会等名:狭山池シンポジウム2023「狭山池と水ー史跡から考えるくらしと水環境ー」

発表場所:大阪府立狭山池博物館
発表年月:2023年10月28日

標題:神が潜むデザイン「神の繕い」
著者名:栗生はるか
雑誌名:Professional design web
発行年月:2023年11月

標題:下北沢～三軒茶屋 建築まち歩きツアー
案内人:金谷匡高
主催:東京アクセスポイント
開催日:2023年11月5日

発表標題:豊かな森づくりにつながる木材利用推進公開セミナー、パネリスト参加
発表者名:石渡雄士
学会等名:秋田経済同友会
発表場所:ANAクラウンプラザホテル秋田
発表年月:2023年11月22日

標題:日本の都市に宿る水の神々～島原・大坂・江戸を例に
著者名:高村雅彦
雑誌名:かわさき市民アカデミー
発行年月:2023年11月28日

標題:研究会の歩みと成果を振り返る二日間
著者名:齋藤智志
雑誌名:『怪と幽』vol.15
発行年月:2023年12月

標題:渋谷桜丘を楽しむ
著者名:皆川典久
雑誌名:東京人2024年1月号
発行年月:2023年12月

標題:楽しみたい、残したい、Tokyoのお風呂屋さん 若手経営者らと語る
著者名:栗生はるか他(インタビュー)
雑誌名:朝日新聞デジタル
発行年月:2023年12月

発表標題:横浜と川崎の水から見た都市と地域の空間構造
発表者名:石渡雄士
学会等名:2023年度後期かわさき市民アカデミー講座
発表場所:Web講座
発表年月:2023年12月5日

標題:恐怖の賞味期限
著者名:横山泰子
イベント名:話芸・パフォーマンスアートとしての実話怪談
発表年月:2023年12月9日

書評

評者名:内藤啓太

雑誌名:『建築討論』(Web版)、日本建築学会
発表年月:2023年3月
対象書籍:宮城俊作『庭と風景のあいだ』鹿島出版会、2022年9月

評者名:根崎光男
雑誌名:『関東近世史研究』第93号
発表年月:2023年9月
対象書籍:安田寛子『幕末期の江戸幕府鷹場制度ー徳川慶喜の政治構想ー』(河出書房新社)

*2024年3月現在

江戸東京研究センター長

米家 志乃布(コメイエ シノブ) 教授 文学部 地理学科

研究プロジェクト・リーダー

地理情報システムと名所の景観
米家 志乃布(コメイエシノブ) 教授 文学部地理学科
福井 恒明(フクイ ツネアキ) 教授 デザイン工学部都市環境デザイン工学科

江戸東京の文学と都市史
高村 雅彦(タカムラ マサヒコ) 教授 デザイン工学部建築学科
小林 ふみ子(コバヤシ フミコ) 教授 文学部日本文学科

表象文化と近未来デザイン
岡村 民夫(オカムラ タミオ) 教授 国際文化学部 国際文化学科

山道 拓人(サンドウ タクト) 准教授 デザイン工学部建築学科

特任研究員 (五十音順)

陣内 秀信(ジンナイ ヒデノブ) 特任教授 法政大学名誉教授
田中 優子(タナカ ユウコ) 特任教授 法政大学名誉教授

兼任研究員 (五十音順)

赤松 佳珠子(アカマツ カズコ) 教授 デザイン工学部建築学科
岩佐 明彦(イワサ アキヒコ) 教授 デザイン工学部建築学科
大塚 紀弘(オオツカ ノリヒロ) 准教授 文学部史学科
小口 雅史(オグチ マサシ) 教授 文学部史学科
川久保 俊(カワクボ シュン) 教授 デザイン工学部建築学科
衣笠 正晃(キヌガサ マサアキ) 教授 国際文化学部国際文化学科

下吹越 武人(シモヒゴシ タクト) 教授 デザイン工学部建築学科
高田 圭(タカタ ケイ) 准教授 国際日本学研究所
高見 公雄(タカミ キミオ) 教授 デザイン工学部都市環境デザイン工学科

内藤 啓太(ナイトウ ケイタ) 教務助手 デザイン工学部建築学科
中丸 宣明(ナカマル ノブアキ) 教授 文学部日本文学科
根崎 光男(ネサキ ミツオ) 教授 人間環境学部人間環境学科

増淵 敏之(マスブチ トシユキ) 教授 大学院政策創造研究科
松本 剣志郎(マツモト ケンシロウ) 准教授 文学部史学科
横山 泰子(ヨコヤマ ヤスコ) 教授 理工学部創生科学科

客員研究員 (五十音順)

安孫子 信(アビコ シン) 法政大学名誉教授
石神 隆(イシガミ タカシ) 法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
石渡 雄士(イシワタ ユウシ) 秋田公立美術大学美術学部美術学科

景観デザイン専攻 助教、エコ地域デザイン研究センター客員研究員

稲益 祐太(イナマス ユウタ) 東海大学工学部建築学科准教授、法政大学デザイン工学部兼任講師、エコ地域デザイン研究センター客員研究員

犬塚 悠(イヌツカ ユウ) 名古屋工業大学大学院工学研究科准教授

Olimpia Niglio(オリンピア ニーリオ) イタリア パヴィア大学工学部土木・建築学科教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員

CAROLI Rosa(カーロリ ローザ) ヴェネツィア カ・フォスカリ大学言語学・比較文化研究学科学科教授

香月 歩(カヅキ アユミ) 東京工業大学助教
金谷 匡高(カナヤ マサタカ) 世田谷区教育委員会学芸員、エコ地域デザイン研究センター客員研究員

神谷 博(カミヤ ヒロシ) 特定非営利活動法人雨水まちづくりサポート理事長、エコ地域デザイン研究センター客員研究員

川添 裕(カワゾエ ユウ) 横浜国立大学名誉教授
川田 順造(カワダ ジュンゾウ) 神奈川大学特別招聘教授
北山 恒(キタヤマ コウ) 有限会社awn CEO、法政大学デザイン工学部名誉フェロー、横浜国立大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員

栗生 はるか(クリユウ ハルカ) 一般社団法人せんとくとまち代表理事、法政大学デザイン工学部兼任講師

河野 哲也(コウノ テツヤ) 立教大学文学部教育学科教授
齋藤 智志(サイトウ サトシ) 秋山庄太郎写真美術館 主任学芸員
佐竹 雄太(サタケ ユウタ) 創造系不動産株式会社マネージャー、建築家住宅手帖編集長

白石 さや(シライシ サヤ) 東京大学名誉教授(東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター協力研究員)

Giorgio Luigi RISSO(ジョルジョルイジ・リッソ) Director, Top Manager, Unione Comuni Di Moncalieri, Trofarello, La Loggia (モンカリエーリ、トロファレロ、ラ・ロツジャ自治体連合) / 理事長・マネージャー

鈴木 裕輔(スズムラ ユウスケ) 名城大学外国語学部准教授
高道 昌志(タカミチ マサシ) 東京都立大学都市環境学部助教、エコ地域デザイン研究センター客員研究員

星野 勉(ホシノ ツトム) 法政大学名誉教授、国際日本学研究所客員所員

皆川 典久(ミナガワ ノリヒサ) 東京スリバチ学会会長、鹿島建設株式会社

森田 喬(モリタ タカシ) 法政大学名誉教授、エコ地域デザイン研究センター客員研究員
森中 康彰(モリナカ ヤスアキ) 一級建築士事務所 小坂森中建築 代表
山本 真鳥(ヤマモト マトリ) 法政大学名誉教授
渡邊 真理(ワタナベ マコト) 法政大学名誉教授